

塔柳川

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年七月二十五日 印刷
昭和四十三年八月一日発行 (毎月一日発行)
(第三十五号)



No. 35

百句シリーズ (完)

八月号

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬策 焼売

大 阪 な ん ば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

誇る
海岸
美を
風光
明媚
な

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

薄笑い貧乏神の私語に似る

中島生々庵

おばあちゃま良妻賢母のシルエット

老夫婦無口のまの朝の膳

君を祈れば君の遺影の目もうるみ

阿弥陀さまきっちり閉めたらせつなかる

今月のことば

サイケ調という言葉をしばしば聞く。やつとフーテンというのが、あんなカッコウをしてるのがフーテン族というものだ程度に判りかけた私の回転の悪い頭では、この言葉にどんな意味があり、われわれの生活する社会にどんな内容をもたらすかトンと見当がつかない。それを追っかけるように今度はサイケ調という言葉が飛び出して来た。私の脳細胞はあちこちに痙攣を起しはじめる。世間ではこうした言葉の実体をどうの昔充分つかんでい

て、私だけが乗り遅れているのだという事になると妙な劣等感さえが湧いて来る。

川柳の中にもこの劣等感に似たような錯覚を起させる句につき当る事がこの頃少なくない。私は敢えて私の劣等感を錯覚であると思慰してはいるが、サイケデリックで彩られた句が新宿や数寄屋橋辺だけでなく全国の抵抗力の弱い層に拡がって行ってやがては定着しそうな予感にさえ襲われる。私はあくまでも私の錯覚であることを願うものである。

川柳塔八月号

川柳塔八月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

川柳に救われる……………傍島静馬…(2)

川柳初篇研究……………(六十二)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

川柳明治百年……………清水白柳…(26)

奉天柳人太平楽……………(大陸巷談)……………東野大八…(42)

豊臣秀吉……………(七)……………富士野鞍馬…(46)

私論・柳論

川柳に救われる

強烈な八月の太陽を弾き返すカナの赤がダレ切った真昼の庭に一際印象的だ。

去年の秋、姪の結婚式に列席したが、挙式二時間ほど前、図らずも弟から新婦側の親戚代表として祝詞を述べるよう頼まれた。こんなことは大の苦手で弱ったが他に人が無かったので余儀なく引受けたが、さてそれからが大へんだった。型に嵌った官僚式は無意味だし、長ければダレ短かければスカみだいだし、思案の結果自作の川柳でやることにした。

それから急いで祝吟を考えるやら、新旧作の中から恰好な句を思い出したりして、とに角祝詞らしいものに纏め上げた。

今日からはふたり何処に居ても二人
夫は会社など職場へ、或は出張などで常に留守勝だが、離ればなれになっても心はいつでも二人であることを忘れず、喜びも悲しみも共にすること。

新世帯味のことなど云うとらず少しぐらい甘からうが辛からうが、新妻の手料理は何んでも美味で、それこそ味など判らないので

秀句鑑賞……………後藤梅志…(44)

痴盲録……………高鷺亜鈍…(31)

自選百句……………北川春巢…(22)

西尾 榮……………(24)

近作柳樽……………若本多久志選…(32)

松江梅里一周年追悼句会……………(41)

初步教室……………菊沢小松園…(48)

大萬川柳「他人」……………清水白柳選…(52)

★柳界展望……………(薰風)…(54)

★路郎先生三周忌句会……………(庸伯)…(56)

★各地柳壇……………(文秋)…(60)

一路集「夕涼み」……………大江秋月選…(50)

「薬」……………今西章雅選…(50)

「有名」……………大山雅城選…(51)

★編集集後記……………(白柳・一三夫)…(73)

はないだろうか、と、ここでもやっぱり夫婦円満を説いておいた。

産院へ夫うるろしに出かけ

やがては当然の帰結として第二世の誕生となり、句のような笑ましい状景も見られることだろうが子供はとても可愛いものだし、お互いの生命の延長でもあるからだしどし作ること、だが人それぞれ都合もあることだろうから、そこは二人で相談して適当にと、助言もしておいた。

ささやかなくらしの日日にある

感謝

物珍らしいうちはお互いにトラブルも無いが、追い追い感激も刺激も薄らぎ生活が単調になってくるとつい我が儘が出てくる。善きにつけ悪しきにつけあらゆる事物に感謝の心を忘れず、明るく楽しく日常を過すこと。

金婚の席に似合いの友白髪

最後をこの句で結んだが、右はホンの要領だけで、実際はもつと町寧にユーモアを混え約三分余りをつけた。自席でメモを見ながらだったので気分もわりと落着いていたし、われながらよく出来たと思った。式後の噂も今日の秀逸だったとのこと、意外なところで川柳が役立ったことを嬉しく思った次第だ。

(傍島静馬)



中島生々庵選

大阪市 西 出一 栄

後学のためと競馬で敗けてくる

独酌で毛胄撫で撫で妻の留守

断たれても咲かせて見せる壺の花

顔見せただけでよろこぶベッドの眼

ことづけの見舞とどいた日の失意

豊中市 戸 田 古 方

回れ右すると左が右になり

色眼鏡外してみたら空の碧

童心になってスッてんコロリンこ

へべれけになっております無我の境

チンパの足に蟻がふみ殺されそうだ

大阪市 大 坂 形 水

法螺ぐらい吹ける男になり給え

コンピューター持って商機を取り逃がし

金繰りのメドがつかない胃潰瘍

夏建具入れて衣桁の置きどころ

娘等にせがまれて行くビヤーカーデン

香川県 三 井 醉 夢

書錬成会にて(三句)

書にうつつぬかし悪妻徹夜する

墨をする無心のときのありがたさ

書くほどに下手の横好きさとらされ

峠から未練の渦に手をふりぬ

更年期らしい人恋う愚に気付き

高槻市 傍 島 静 馬

大小が目立たずおやつ無事にすみ

渋しぶの寄付とは近所思うてず

嫁った娘にあてはめてみる嫂の所作
のんびりと頼めばあっさり貸してくれ
数字には強いがそれほど蓄めていず

平田市 久家代仕男

満場一致つむじ曲りを役に推し

仕事着に替えても煙草ふかすだけ

流れ星ばかり目につく夜は釣れず

割切ってますのとミニの膝坊主

世間さま並みとは文化かかりすぎ

岸和田市 内藤きさ子

それぞれに悪友があるいい夫婦

デザイン凝りすぎ風鈴重たそう

救急車午前零時の音で来る

いっお逢いしても雨蛙君ひとり

半袖の腕の太さに威圧され

大阪市 本多柳志

結局は他人の智恵で酒になり

あの世までもって行きたい嘘があり

税務署へ来てライバルとうまが合い

元部下を君づけにして保険が来

室生寺吟行

善男も悪女も同じ雨にぬれ

岡山県 浜田久米雄
呼び捨てにしてもきれいな返事が来

辻褄が合わず双方ともに折れ

向こうからかかった電話よくしゃべり

癖のある手紙差出人が知れ

巣立ったに気づけば次の燕が来

岡山市 服部十九平

喜劇いまクライマックス入歯落つ

女神の目悩める女に冷たすぎ

駅毎に年寄駅の名を尋ね

伝説でよし天照皇太神

週刊紙宮様方が儲けさし

大阪市 金井文秋

下を見て暮しいっこう出世せず

妻に座を取られチャンネルは子に取られ

つけの利く店が休みという不運

なるようになってしまった差し押さえ

やけくそで食べてまんねとよく太り

神戸市 仲どんたく

電報のような手紙の裏の恋

ときめきを大切にして待つロビー

酔えば思い増す人があり夜の隅

九州も東北も居て宿（じゆく）のバー
どれか当るやろうと釣書五部も書き

室戸市 奴田 原紅雨

ご指令の席へ造花の如くいる

鉢植えに妬心を知られまいとする

葱坊主おとなの恋は大嫌い

火種消すのを忘れていた女神

燃えつきた男のこれが素顔です

青森市 工藤 甲吉

ただのぞくつもりへ自動ドアひらき

藤棚の下で浪人同士逢い

家中の騒ぎは孫が血を流し

忠の字は消え孝の字も消えかかり

入歯はずして頬をあわれむ

富田林市 川端 東雲楼

貞女罪あり夫笑を忘れたり

あばくまじ人それぞれ泣きどころ

すまぬとはいわず反省しています

ぼろくそに言いたい人に言えぬ義理

雑草と間違えられた珍種苗

大阪市 正本 水客

霧の表情へ山門はなかなかの男振り

如来さまの胸の量感に押され佇つ
修学院離宮（三句）

借景のみごとさ四明ガ岳をふところに

上ノ茶屋湧き出たように池が浮く

水蓮の白が水面をひろくする

大阪市 後藤 梅志

偶然を尊重義歯にして然り

部下が出来ても手足ほどにはならず

ながい腕を出して垣根になつてるバラ

全国区がひしめく御堂筋南

祝、ふあうすと全国川柳作家（十三回）句集

句集編んで親孝行のあじ分かり

大阪市 不二田 一三夫

落丁に似た人生をみんな持ち

みそ汁のこげた匂いに起こされる

墓地に住む蛇は女の精に見え

寄席（二句）

落語家は活躍「落語」さびれてる

林家染丸師逝く

「新たぬき」あの出囃子で冥土に出

豊中市 寺田 花宵

名木に仕立てるための枝を截り

變哲も無いスピッツと居る二階
旅の宿トリードマークの浴衣着せ
道問うてすっかり旅の人となり

大阪市 河井庸佑

どのように申されましてもと腰強く
親の夢つぎつぎこわす子のしぐさ
運七分三分の腕の差を見せる
体育しかできぬ子どもに夢があり

京都市 都倉求女

街のリズム乱して世論かけ抜ける
診断の軽さへ苦痛がひようし抜け
僕程度の出世の鯉を子にも立て
あきらめた話をも一度他処でする

堺市 青野遊仙

何辺も変えて置場所元の位置
孫来る我家の家系美人無し
原色ばかりさて此次は何を着る
横断も人の後ろをついてゆき

豊中市 米虫一乃字

校庭は暑中休暇で雲もなし
冷奴女房も余程汗っかき
とっときのブランドール中にしてやられ

夢の中の札束ズッシリ小気味良し

岡山県 藤原秋月

難しく言うから謝罪しておこう
秒針にすまぬ気もする無為徒食
その辞書は間違つてると言う頑固
色盲もカラー写真を写しとり

倉吉市 奥谷弘朗

権力にいどむ根性も消えかかり
気にかかることが積っている無口
どう見ても愚妻少々妬き過ぎる
鈍才の割りに無事故で二十年

高槻市 若柳潮花

逢いにゆく鏡へ猫も来て坐り
折鶴の動く風あり梅雨の午後
嘘のある生活へ馴れた化粧する
囲われているから浮気しとうなり

鳥取市 河村日満

誰に似ているのか孫の鼻高し
育児法どおりですこし軽い孫
抱けと泣く声だと夫婦ともわかり
新築になって呼ばうも妻の見栄

新居浜市 小林孝正

夜逃した村へ自家用車で帰り
嫌いではないから怖いと女
配膳のカレーが匂う恢復期
長病の友に榮進云いそびれ

小松市 関戸宗太郎

ドル捨てにゆく役得へ御餞別
発車ベル律義な人が乗り遅れ
示談屋がむちうち症にしてしまい
就職がきまり大学見直され

倉敷市 松下梁水

善人の微笑怒りとは見えず
卒業のない人生へ歩を変えず
もみくちやにされ友情は暖たかし
切角のプラン天氣が妥協せず

名古屋 吉田水軍

古書柳樽・二篇を得て

水茎も紙魚も明和の色たたえ
つまみ食い社長をはじめ奉り
改札はかるそうに行く大荷物
キンキラキンで金借りに行き

大阪市 中川滋雀

灯を消して臉の今日を繰り返し

今日もまた生きる覚悟の髭を剃り
なめくじの跡が光ったまま途切れ
風呂敷を広げて尻尾包みかね

愛媛県 渡辺曉童

駅の名が読めて次次次も読み
車より早いので汽車ホットする
これだけでこれだけ酔ったサントリ
廃校の庭しみじみとみじめなり

鳥取市 藤本礎山

信じないから妬けるのとちやいますか
新茶の香妻と分け合う午後の幸
すすけてるダルマに片目で見つめられ
よく聞けばやはりどこにも金がなし

倉敷市 水粉千翁

恋をしていますと云わぬ片えくば
食い給えとは借りのある顔でなし
逆縁の愚痴ばかなやつ馬鹿なやつ
並木道あの日へ一歩ずつ戻り

笠岡市 松本忠三

休職の辞令見舞に添えて出し
絨氈におそろおそろのちびた靴
夏草に墓石 頭だけ覗き

天秤にかけてどっちも不合格

九州横断の旅

倉敷市 本田恵二朗

雲仙へ雲慕い寄り慕い寄り

阿蘇しぐれ麓は嘘のように晴れ

山波の緑を泳ぐ鯉となる

劔聖としばし語らう武蔵塚

大阪市 橘高薫風

能登から佐渡への旅(四句)

銭湯に隣す輪島映画館

さい果ての旅に見し滝海へ落つ

海渡るたかが佐渡とは云う勿れ

男ありすっぱり痩せておけさ節

門真市 福島鉄児

ひよろひよろと日陰の草も花をつけ

投資するつもりで送る学資金

贈り主わからぬままに荷が届き

俄雨風の如くに飛ぶ若さ

松江市 中川晃男

観光へ古蹟化粧をさせられる

よく利いたわさびが話途切らせる

新緑を斜めに裂いて救急車

小康を見せて白々明けそめる

岡山県 田村藤波

倒産をよそに温泉の町さんざめき

宿命と云う字がわたしの為にある

清掃奉仕ちびた箒にある誇り

頭より帽子が大事の濡れ帛

高槻市 山田季賛

昇給のうわさ人ごとでなしに聞く

順番が僕にも来てた春の風邪

かけ声はよいがいう働かず

女には女の涙あると妻

姫路市 隠岐不酔

波に乗り反で買うたに坪で売り

半年の苦勞三日でバラは散り

御婦人に効く温泉へ僕も入り

停退も過ぎて今では見切品

ハワイ 築山快夢起

黒人と袖すり合うもバスの旅

他人の金算えることに明け暮れる

財産が出来りや黒杵待つて居る

ハワイ移民百年祝祭を迎える

血と汗の移民年輪尊しや

今治市 越智一水

結局は女がおれて丸くすみ

田舎バス一家が乗って走るよう

一本のマツチするにも社交術

幸せな散歩を風がおしてくれ

奈良市 村上春巳

ライオンのあくび見て来た幼稚園

老らくの恋南禅寺銀閣寺

美しい芝鹿が居て奈良のもの

立札のとおり飛鳥を歩かされ

岡山県 浜野奇童

馬鹿になりきれず焦点定まらず

古傷へさわられそうでひとり居る

大吉と出た石段を軽う降り

帰郷の子待つ日めくりを又めくり

熊本県 有働芳仙

震度5へ非常持出し放つとかれ

字余りと字足らずのような夫婦なり

女心掬えば虹が清えていた

娘の酌のどこで覚えたいい手つき

大阪府 川口弘生

親類も嫌がる保証をするも友

生きていた事がうれしく友と酌む

美人ではなくもかわりの利かぬ妻

船酔いをおそれて先にのんで寝る

島根県 藤井明朗

旅好きのプラン春が過ぎ夏が来る

ビヤホール寄りましようとか妻から誘い

世話好きもほどほどと愚痴を背に聞き

日曜の用事へ妻ブレイキをかける

竹原市 山内静水

定年へあまりにでっかい妻の夢

もうどうなってもいいの 嘘がつけません

歩み寄り相手の真意を知っただけ

居てくれぬボーナスだけど灯を供え

大阪府 今西章雅

有難い金だがしぶしぶ貸して呉れ

土曜からいそいそゴルフに夫行き

飲まぬ父囲み父の日子等が飲み

あと一年と疲れた胫をかじられる

笠岡市 木山要次

兇刃に似た閃きが通りすぎ

糟糠の妻にも虫のおりどころ

大それた連想をして寝つかれず

老化した現象なのか花が好き

愛媛県 村上旭童

働けば食えて六十まだ強し

もう降っていい頃に降る雨でなし

野菜から米まであるを羨まれ

枇杷が熟れ山桃が熟れ子を思い

岡山県 直原七面山

気軽に欠伸の出来る地位

ベンチャラにコロリと参った女子大出

ねだるのが上手 二号が性に合い

シャッターへ猿適当にポーズとり

出雲市 尼緑之助

耕三寺

こんな念願もある金ピカ耕三寺

尾道にて

文学の小径若葉の下の石

眺望を誇り巖の中の寺

新緑がロマンを強いて光る海

大阪府 早川清生

アカハタを読みおり席を譲らない

税を食う順に大学左傾する

妻ともめた思ひ出ふえて家具そろふ

いつからかわが死後の子を想いおり

京都府 大鶴喜由

背負紐わたしの乳房はこの太さ

身も心も捧げまつりて逃げられる

心盗まれて訴えるところがなし

持病には勝てず折伏されにけり

大阪府 山川阿茶

トップモードもう老齡のシルエット

お不動さんへ無料の水だけかけて去に

解説がくさした途端ホームラン

結論はあたってくだける外になし

大阪府 木村水洞

四国巡拝後期石鎚山

鈴の音をしばしとどめて仏法僧

五台山竹林寺

国宝の庭を枕に旅の夢

竜串と見のこし

見のこしの景に見とれて次の船

おのれ知る心ゆたかな昨日今日

藤井寺市 西いわを

かき餅の缶に変わった海苔の缶

水吸うて捨てられてゆく茶滓かな

雑沓の若さが俺を押して来る
死んだそうだと噂をされて生延びる

東大阪市 久米奈良子

ぐい飲みで芸術論へむかいあう
いのち燃ゆ女としての目を数え
美しく愁いて世辞にそつがなし
まだ土に返れぬ野火の燃えつつく

鳥取市 森本法泉子

実家にて

八十の母から小遣銭もらう

松江中学物故同期生追悼祭

神官の声に次々顔が浮く

温泉のある駅二人ずつ降りる

六月の大山にて

新緑の中に反戦ビラをはり

大阪市 室谷鉄舟

四国、北九州を旅行して

九州が雨と聞きつつ旅仕度

雨止んで道後を霧が詩に包む

阿蘇下りて灰払い合うハネムーン

雲仙をくまなく歩き下駄の豆

大阪市 天正千梢

神のめぐみ忘却に救われる

払うてもくれず時間までとられ

酒煙草けちらぬ女房にしかれて居

雑草を抜きつつ強さ子に教え

倉敷市 野田素身郎

左遷の地にもあった美人のいる酒場

いふなれば営業用の渋いタイ

今去った女を誘う女連れ

ざらにある事だがそれで今悩み

守口市 村田瓢太

瀬田大橋

唐橋のそばをひかり号突走り

法華寺

横笛の像千年の風に耐え

法隆寺

国宝の塔も雀の宿となり

春日神社

万燈を寄進せし人今いずこ

香川県 岡田拳法

自分だけ犠牲払うているつもり

叩いた父も子とともに泣き

不覚にも喧嘩やめてと子に言われ

基地移転すれば誰かがまた困り

竹原市 小島 蘭 幸

字が下手と下手で文通よく続き

違反してないけどパトカーと出合い

趣味読書そろそろ恋がしたくなり

片思いオハヨウぐらいなら言えて

大阪市 吉岡 美房

ベトナム平和交渉

血まみれの手も拭わずに出す握手

雑草の安堵は長い雨の庭

疑うているかと調査居直られ

報道の自由被害者とり囲み

倉敷市 井上 旭 峯

無人駅しぐれて微笑の白痴佇ち

正義漢身震いをして立ちあがり

返り咲く今日よろこび囁みしめる

心なき落書がある山の宿

高石市 谷 沢 好 祐

ハイコラ ハイコラの方が良いとは知りながら

定年の駅へ鈍行近づけり

親鳥の只黙々と卵抱く

散ることも出来ぬ造花のいやらしさ

ハワイ 羽佐間 柳葉

これ以上昇れぬ椅子にしがみつ

金蓄めてから厄年が気にかかり

明治百年梅干弁当異状なし

喜びの電話受話器をそっと置く

奈良市 宮口 笛生

想い出す友の一人に君がいる

大金が戻る落し主拾い主

見つくした本ばかりなり歯科で待ち

気の弱い男が人の上にたち

宇都市 平田 実男

奥さんの見栄を月賦屋うまく突き

やけくそのように警官隊とデモ

馬鹿にした亀の歩みを見失い

居心地を貧乏神にほめられる

倉敷市 木村 千容

夢の園

百姓の子が風雲を巻き起し

宿直医も亦苦しい立場

訴えもよそに一本打って去に

岡山県 大森 娛句 楽

御詠歌が緑蔭を縫う通路笠

道後まで来て坊ちゃんの名を嵩め

孫

語り手も聴き手もたるみ寝てしまい

泉大津市 高津徹也

松風をその気になって聞いてみる
お世辞にも黒を着こなす女でなし
食べかけた箸そのままにいい話

岡山県 横山一声

火災保険はいつて居たら焼け残り
たちのきで建てた新築うらやまれ
選挙演説背中で聞いて田植する

大阪市 児島与呂志

若い気の階段二段踏みはずし
たのまれて来たとも云えぬ仲人口
自分でも若くないとは承知なり

岡山県 池田古心

又馬鹿にされそな投票頼まれる
後半も職うばわれて寝て生活し
或る日フト脳裡へ渦巻く死の恐怖

京都市 松川杜的

薪能観賞

弱法師杖一本の舞どころ

穴太寺巡拝

朽ち果てた濡縁でよし穴太寺

法界寺拝観

壁画から抜け出しそうに舞う天女

大阪市 水谷竹莊

惚れてると一と言ひわせ嬉しがり
値切るだけ値切って相談して来ます
宴会の幹事お女将にもてなされ

松江市 柳楽鶴丸

割切れ割切れそつと心に云い聞かせ
妥協して出世する気はさらになり
問答無用伝家の宝刀ストライキ

小松市 馬場魚山

炬燵から聴く花便り行けもせず
金ラッシュ金の指輪を一つもち
農薬をまいたと知らぬつばめとび

鳥取県 清水一保

母親の方へ書き足す娘の便り
長の旅人も週刊誌も疲れ
晩酌へ妻もほろ酔ういい話

倉敷市 小幡里風

本番を明日に控えた仕舞風呂
僕は白 白だと太陽との対話
正面に座り邪教を信じ切り

ハワイ 上田紅溪

尺八へついて行きたいおぼろ月
苦勞して溜めたお金をたしなまれ
何時弾が飛んで来るやら選挙戦

守口市 羽原静歩

積乱雲ダンプの列を見てござる
口開けて寝る日の疲れうらやまし
もてている秘密を聞けば金のこと

新居浜市 安藤桂仙

執念の鬼か女がレース編む
こめがみをみみずばれさせだまりこみ
やめて見てやっと己の顔を知り

八代市 永松道雄

総入歯もう十年の音を立て
あらたかな温泉飲んだり浸かったり
羨やましい奥様の皺君の皺

和歌山市 垂井葵水

コンピューター自社の倒産はじき出し
入院の妻からメモで衣更え

お小言に蠅の動きを見て耐える

和歌山市 西尾公作

全集を飾って暮し楽になり
立ち読みもあって書籍屋繁昌し
ウイנקも真似てチビっ子のどじまん

堺市 高橋千万子

忘れたい過去へいけずな人ばかり
政敵の死へ同情のふくざつさ
早起きにもう目覚しのいらぬ年

伊丹市 小川静観堂

日ッ本の出来事みたいにケネディの死
ミニスカートすれすれのところ蚊にくわれ
男児志を立ててマイホーム

大阪市 礪弓彦

たどたどし手紙に熱のある返事
一桁の違う御礼は助手へ出し
ほのぼのと女はタンス開けるなり

芦屋市 丸川初甫

胸のバラへ紹介をするタイミン
身延山

鉄斎の濡にも似たり身延山

登呂遺跡

弥生式土器のつぎ目に見る古さ

鹿児島市 土岐トク子

漁火が哀し帰航の桜島

楽屋裏きいて附添い見直され

あまりにも軽ろきに老妻だいてみる

下関市 国弘半休

捨て猫が先に帰った立話

腹ぼんと狸っ振りに惚れられる

ワニじつと苔のむすまで背をあぶり

大阪市 福井野迷路

握手した手だけ痛くて名は忘れ

心にもない御言葉と思えども

海ゆかば衝突陸ゆかば轢き逃げ

下関市 桜川不水

ライバルと対決をする猫の背な

寝返りも打てず狸寝手がしびれ

遠からん者に聞かせる宣伝車

松江市 岡崎祥月

働く意欲勧告に背をむけ

月雲にかくれ星空だけのこり

老らくのオアシスもとめ恋もせん

宝塚市 小島無聖

三方五湖にて

三文の得は五湖に見る日の出

絶景の慈悲へ無言の礼で辞し

都塵へと還る車のむし暑さ

兵庫県 河原みのる

平然と平然として農家胡瓜買う

いっそあの時などとは生きてるから云えて

よってたかってじじいが悪いことで済み

青森県 木村涼人

近頃の美談百姓継ぐと言う

死人より自分が可愛想で泣き

英語崇拝言葉が敗けたわけでなし

出雲市 野村岬月

習性のあわれ直立の電話口

どこがようてどこがようて女給さんの朝

とうちゃんは酒飲んでますと又書かれ

熊本市 楠田英子

法要の謝礼を寺に聞くわかさ

風鈴のうれしや踊るように鳴り

住み馴れた町美しく雨が降る

兵庫県 遠山可住

忘れっぽくなった女房と笑いあう

山売ってボンボンに過ぎた嫁もらう
美しく生れ化粧がなくなり

美禰市 安平次弘道

きず物にされたと女金にする

神頼みまだ万能でない科学

ぎりぎりの線の水着を着る自信

出雲市 原 独仙

高給が未練姉さんまだ嫁かず

主任だけ緊張部課長不在なり

敬老会加入を蹴って鋏を振り

桜井市 岩本雀踊子

あるところにはある一億のつまみぐい

どちら向いても鯛は目出度い姿なり

嫁がせた娘が無事な二重あご

ホノルル市 加川カロ

迷夢からさめりや敷居の高い家

迷い児は只あっちから来たと言ひ

迷夢からさめてお茶漬けうまい朝

松江市 小林孤呂二

叱かれた子に先生の良さ教え

参観日内弁慶がよく解かり

相槌がいつもと違う妻を知る

泉佐野市 大工睦夫

法要へ僧にも会社見せたがり

降る日だけ廻り道でもアーケード

独身寮三十才で放り出され

兵庫県 大江秋月

言い訳けに役立つことも妻の知恵

団地から団地へ夏の風が抜け

乗り越したとたん検札起しに来

西宮市 島居百酒

三味線は弾けぬがゴーゴーなら踊り

嫁きおくれまた免状が一つ増え

南欧旅行

ローマの廢墟積尊をふと想ひ

笠岡市 木山遠二

日日好日体の為に酒も飲み

付添と見たのが女史の亭主なり

ふところへ入れると出刃は嫌なもの

大阪市 宮地双楽

栃木、福島への行脚して

すくすくと育ち苗代和が芽ばえ

一癖のある返盃も軽く受け

席ゆずる小さい善意も上手下手

大阪市 宮尾 あい き

岸和田市 葛城 伊三郎

雨傘が日傘に変わる梅雨の空
多産の母御手本ですと娘は産まず
東京タワーで買って来た事土産にし

堺市 新谷 笑痴

柳友牧野氏の新築を祝す
新築へ燕下見にとんで来る

後進をさえぎるように立候補
理髪屋の夫婦に半分ずつ剃られ
呉市 林野 甦光

天野山吟行

山門の仁王カメラに済まぬ網
終発も出て反省の足重し

しらじらと明けて看護の眼をこする
良薬と思えど苦言に腹を立て
大阪市 西川 誓二

倉敷市 川端 柳子

富田林市 岩田 美代

姑と母故郷の味を忘れない
あたためる若さが欲しいひとり言
雑草とわかり抜かれる運となり

その女淋しい故によくしゃべり
泣いている背とは知らず声をかけ
和歌山市 土谷 城石

鳥取県 森田 布堂

香を焚く母に笑顔の児の写真

大地震ビルより犬小屋強かった
田植唄今も明治にリードされ
加賀市 細呂 木魯木

田植が済んで蛙もほっとする
賽銭はあなたまかせの仏様

失せ物が杢から出てきた子沢山
明治から三代そろって賑やかさ
京都府 清水谷 句楽坊

青森県 工藤 安亭

ふるさとが恋しホコホコ焼けた芋
一年中時の日母の水仕事

僕ピエロ学生ストのトップ切る

しくじりも方便ですと和尚にげ
煩惱の嵐に彼岸近よれず

老夫婦少し待たせる待つつもり
痛いところだらけの妻でよう動き
ミニサイズ比べてみるも女なり
袖口に女のくらしを覗かせる

三林坊居に一泊

ほととぎすここ玉島の奥座敷

田植の腰のばした途端汽車が行き
薬師堂まで来て引き返す宿の下駄
湯の宿の湯番文身して無口
目くばせに哀れ五十の血があわて
私の誤解であつてくれと思うのも女

音を上げぬ決心がちと揺らぎかけ
子へ送る小包母の楽しそう
天気予報当らぬことも話題にし

飛鳥路（二句）

信心のないのが寺の庭で飲み
飛鳥路やミニおりスラックスおり

川村好郎

西尾 栗

北川 春 巢

若本多久志
緑

旧友Sを弔む

遺影ニッコリ友情の厚かりし
俺の葬儀こうしてほしいプラン練る
焼場まで来ても目送しか出来ず
父の日にそれぞれ孫をつれて娘等
父の日の無かつた頃の父想う

菊沢小松園

捨てられた方は静かな夢になり
噂ほど残さず仏になりたま
着飾って出る母親へ遠く居る
再会を期してそのまま振り向かず
そこ此処にわたしに逆むく眼に出会い

清水白柳

フエプロ号事件

どこもかも開けっ放しでいる浴衣
キング師受難

新記録そのときだけをもちやし

R・ケネディ遭難（四十二才）

厄年は日本ばかりと思ひしに

黒人暴動、外出禁止令

宿命を基石におもひ撫然とす

佐世保放射能事件

ノーコメント店子の弱味押し切れず

川傍柳 初篇研究

(六十二)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義^故 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

七・五

万才を下女ありったけ笑ふ也

丸・岡田^二賛。

501 棒組やしつかりだなと三会目 万庵

高須^二三回目の句は多いが、大がい上つてからの句で、駕かきの句は珍らしい。大たい駕屋に三回目と判るのがおかしく、それが「しつかりだな」というのは尚おかし。句意は判るが、その辺がどうもわかりかねる。何か他に解きようはないか？ 或は、「孔明も三回目は打ちとける」の三顧の礼か？ この方がこの句には合いそう

だ。前田^二駕かきが「お客さん三回目です、ね、しつかりやいなさい」といったところか。

棒組やありがたいなと急ぎ出し 八・33

棒組やい、御かっぶくと前おき 三三・23

岡崎^二「しつかり」は①たしかなさま②た

岡田^二「猪首に着なし」は礎稿でいって

る通り軍談調で、軍記物語での意味は、カブトを仰向けに、首の方へ寄せてかぶることである。丸先生の説も新解として面白いが、わざわざ軍談調を点出したのは、やはり礎稿のように祭礼の武者であろう。

500 才蔵は居催促までわらわせる

水砥

高須^二大三十日から元日にかけての根強い居催促も元旦早々に来た才蔵には、とうとう笑わせられたという句で、借金取りの仏頂面も、もう一夜あけては通用しないのである。「ねつい掛取り早い万才」と三面子先生がつけていられる。

万才は舞納めると不人相

万才はみな軽薄に節をつけ 一二・28

万才は泣く子の顔はついに見ず 五・36

万才の口程鼓はたらかず 一三・3

初・19

499 猪首に着なし上下と咄してる 一甫

高須^二六月十五日の山王祭の供奉者であらうと柳雨翁の説あり。猪首に着なしは、鎧武者の講談調（文句取り）。この山王権現の祭礼は、九月十五日の神田祭と隔年に行なわれ、將軍の上覧があつて盛典だった。その隔年制は、延宝九年以来のこと、山王祭は子・寅・辰・午・申・戌に、神田祭は丑・卯・巳・未・酉・亥にやることになつてゐた。その供奉者が上下を着た絵が、「江戸名所百人一首」にあり、川柳大辞典に転載されている。

藤井^二「猪首に着なし」で着つけない物の借着の様子がよくでている。

丸^二万才と年始回りの人との立話と解している。大黒帽子を後ろ下りに（猪首に着なし）かぶった万才がほろ酔いの年始回礼の者と立話をしている正月の街頭スナップ。

らないようだ。別義があるのではないか。

藤井〓前田氏の例句の「棒組や」は相棒に呼びかけた句ばかり。従ってこの句も棒組同志の会話と考えるべきで、岡崎氏の云われる問題の「しっかり」は三会目の客だからしっかりもてるとしっかり御祝儀の二つにかけて②のたくさん、たんまりの意味だろう。従って要約すれば「相棒よこの様子ではお客さん三会目で今夜しっばりお楽しみだ。御祝儀もしこたま丁敷しようぜ」この反対に貧相な客には、「棒組やもてそうもない手合だの」(傍四29)今でも客引きの運ちゃんはお客を見る目が確かだ。この点大たい駕屋に三会目と判るはずがないとの高須説には反対である。また前田説の「お客さんしっかりなさいよ」というのもおかしい。あくまで相棒同士の会話である。川端〓藤井説賛。三会目の客を乗せて駕賃のほかに祝儀もでるだろうと期待しているのだろう。

丸〓藤井説賛。

岡田〓この句の「しっかり」は、小生も多年解釈に腐心した語。岡崎氏が辞典を引かれて①たしかなさま②たくさん、を並べているが、その後者だと考えたい。カゴカキが「しっかりだな」というのは「この客はタンマリ懐にしているぜ」の陰語。小判数枚

の重さより一文銭を五百文の方が重いだろうが、その客の身なり、表情などで、カゴ屋には懐が温かい客だなとすぐ勘づく。そのカゴ屋のニラミたがわず、この客は三会目だから……という句である。

502 仕合せ黒ひ狐へいとま乞 一甫

高須〓黒助稲荷へ礼参りかたがた暇乞に行ったのは、仕合せな女郎という句で、「九郎介を見限るような願をかけ」の姉妹句。正しくは九郎助稲荷で、和銅四年千葉九郎助の地所に、天から黒狐がくだったのでそれを祭ったのだと「吉原大全」にはあるが「増補武江年表」には、萬治元年今戸村の百姓九郎助が自分の畑の中であって邪魔な稲荷社を、吉原に移したものと記してあり、毎年八月一日から祭礼があった。わった。「一日は稲荷が黒いばかりなり」は八朔の白小袖にかけた句である。

九郎助へ代句だらけの絵馬を上 初・2

黒助の一社参りに息子出る 二四・27乙

前田〓身うけされるオイランの九郎助稲荷へお礼参り。「仕合わせさ」がこれでいきる。

清〓苦界から足を洗える仕合せ。

丸〓岡田〓賛。

503 のんだ茶の残りをほふるげびたやつ

万 庵

高須〓飲んだお茶の残り(茶碗の底の方に残った茶)を投げ捨てる(茶碗を振って中の茶を振り捨てる)ことは、現今でもよくする所業であるが、それがなぜ下卑た奴なのか判らぬ。よいお茶(特に抹茶)を飲む人種はそういうことはせぬという上級人物と対比して、そういう人種を「げびたやつ」といったのではなからうか? 解せぬ。岡崎〓茶席でなく、一般でもお茶の呑み残りを庭などにぶちまけるようなことは、行儀のよいことでなく、下卑た振舞だろう。丸・岡田〓岡崎説賛。

高級洋菓子

プラス

堺市役所前 TEL(2)2334

句百選

病人も裸お見舞もぬがされる
へエーこれが胃袋ですかレントゲン
病名もいわずに命保証され

気休めのやいとへ暑いのに通い
付添が医者より先きにさじを投げ
食道のことで主治医と馬が合い
退院の荷をタクシーへ派手に積み
新薬ものみお守りも手放さず
飛行雲見上げる人もない平和

アーケード日本に平和あればこそ
貧乏ゆすり父の真似とは叱られず
観光バス酔わぬ秘訣の目をつむり
旅にしあれば林檎は皮のまま囁り

よい方の茶を老人の日には入れ
八十は医者も見守るばかりなり
安楽死などできない注射攻め
長生きはできんとおどした医者が死に

宵宮のコンコンチキに寝付かれず
青春はよし恋を得て詩が生まれ
中ジョッキでテストして下痢もうなおり

大阪の場末に住んで舌が肥え
ハッキリと嫌いといえる子に困り
漫才で聞いた英語はすぐ覚え
散薬にかえてもううて旅に出る
お隣りもボロ畳なり大掃除

鐘の余韻嫋嫋と聞く待ち呆け
講演会 通訳も原稿読んでいる
恋人のケチな所も頼もしく

自動車の事故で邪恋が知れ渡り
酔うための酒やないかと管を巻き
痺担ぎもしたことがあり強い酒
引退後酒もめつきり弱くなり
気休めも結構楽し月参り

大仏の慈眼は恋も見ておわし
税金をぐちれば逆に羨まれ
大学へ行ける頭が母の愚痴

興奮のシュプレヒコール寝言にも
翻譯のアルバイトして野心あり
スクラップブック根気の嵩を見せ
頼られていと知ってる世話をやき
天才のその後をマスコミ取上げず
劣等感がピストルを持ちたがり
嬉しい日みんな善意の顔に見え
涙もろくなつてしきりに鼻をかみ
民主主義心にもないこともいい
悪銭が身についている太りよう
ミリョネヤーというた昔がなつかしく
また汚職かと思出しだけ目を通し
車窓からなるほど三ちゃん農業や
根が腐ってるに素人水をやり



北川春巢作品

地下街に支店 本店見直され
地下街の気楽さ無名人になり
地下街の便所の位置も知って飲み
一合プラスアルファ満足の色に出し
道がまだ真っ直ぐ見える梯子酒
飲む話あっち向いてる間に決り
興奮をしたのかオームよくしゃべり
お守りもアクセサリーになる若さ
美容体操若さを逃すまいとして
年令も書かねばならぬアンケート
横断歩道まで廻り道して年かいな
一万歩運動 会う人会う人に
収集の趣味はいっさい子に譲り
朝な朝な間借り木魚に悩まされ
官判捺すだけ夜の部で疲れ
写真師の目にもやっぱり借衣裳
浮世絵の紙の匂いも嗅いでほめ
焼跡を見に行けばもう板囲い
冗談にいうた風邪引く十二月
羽子板の押絵より値を見て廻り
先祖代々二十九日に餅を搗き
松の内財布の紐は解けたまま
歩き歩き大事な話する多忙
今晩は喫うなと煙草屋もう寝てる
ご機嫌はお目出度うへもさんをつけ

松過ぎて畳の汚れ忘れとき
トラックの世辞を嫁の荷聞いている
まだ嫁ことせず保母さんを相つとめ
ベレー帽おだててやればぬいで見せ
釣り楽し携帯ラジオ鳴りつづけ
好きな人記念写真にすぐ見付け
老いらくの恋まむし屋へ上り込み
二十世紀後半七十でも迷い
ステレオを聞かねば寝ない子に育ち
うさ晴らすバットの素振りする若さ
おあいそに猫こんにやくを嗅いでおき
セールのある日は映画見てこまし
船長の余生は海を見て暮し
音痴ですみんなモーツアルトに聞こえ
持って来た人形も銀婚式となり
灰皿の掃除こまめにして雨読
腕時計修繕中で日が長し
運賃は高いとも安いとも思い
客減って市電広告になり下り
出稼ぎの旅愁をそそる鯉幟
天下り融通の利く顔になり
聞く耳はあるがだんだん遠くなり
胸突き八丁やでーと受験の子をさとし
読まんならん本ばかりへ桜咲く
子が二人進学できた桜見る

句百選

宿の下駄ぬらして小蟹とらえて来
望遠鏡島の煙でもめている
藤椅子のおく位置があり海が見え
山の湯の夜風をはめる窓をあけ
弱味を見せるなと妻の目が合図
落第も亦楽しからずや座談会
本心を世間話のように言い
ボートも二人ベンチも二人中の鳥
子持仲居もったいないが口につき
牛の瞳に人間何をあわてとる
通訳にきけばひどい訛りの英語です
香水の匂い血圧上りそう
最初から来られまっかと捻られる
背広着てもオッサンの域を出ず
情熱はいっそ無口にしてしまいい
水煙あげて神輿は洗うもの
一人漕ぐボートはやけに速いなり
花屑をあつめてボート屋暮れのこり
ゆき屈いた言葉で姑送り出し
最後の最後の味方は妻なりき
唯々諾々と爛の追加も三カ日
再会に巡査立ち合う不倖
外泊の電話言うだけ言うて切り
めえをたく家風は暗き台所
交渉はギヴアンドテイクの肚でいる

チト低い鼻でサービスゆきときどき
口八丁自分の恥もさらけ出し
持って死ねなんだからしい銀行から櫛
大臣に紐がついてる阿呆らしさ
リーダーともおっちょこちょいとも言われ
赤ん坊湯気のまんまを抱き上げる
滝を背に逆光線も己むを得ず
叱らん先に出勤のすんまへんすんまへん
灯取虫客も扇子でうちそこね
展望台陛下も同じ方を指し給い
すねてなんかいまへん欲求不満です
古都かなし都大路のパチンコ屋
うりざね顔質素な家に生れて来
仮縫いのお世辞前から後ろから
坂道の上の家なり推理され
流し目も上目も使わず妻は老け
持ち味を生かす化粧の濃ゆからず
鼻がようきいて姑の因果なり
後手後手と廻る生活の五十年
色の道メンデルの法則ここに生き
アパートの新婚インスタントのよう
五人目の孫抱く力余りけり
アバンチュール横町をぬけ路次をぬけ
操短の工場の上の揚雲雀
商売の方もコレストロールたまり出し



西 尾 葉 作 品

月ヶ瀬吉野長谷生駒仲居のスケジュール
老梅の孤独を愛す涯っぶち
芸者の耳打ち高いものになり
倒産へ非力な親類許り寄り
右書左楽音痴の俺は如何せむ
或時は折る心で受話器持ち
今気がついたような御挨拶
掃苔の一人は義理の仲の人
プラモデルませた言葉で手伝わし
社長今日孤独の二字を噛みしめる
キーホルダーと名が変わっても親父持ち
襟巻の狐の顔は従姉妹めき
琥珀色の湯呑の主は生字引
スカンタコという声が大きい仲居部屋
娘のグループへ父の下手なしやれ
茶屋酒がだんだん旨い地位になり
手を洗うてるとこへ来てささやかれ
美容院から戻りあわてまいことか
ゴシップは今日又かえたネックレス
孫が来て儂のペースをくずすなり
一歩出ずれば然り吾旅人となる心
旅や憂しおばはん団体と乗り合せ
イメーজの踊り子もみず伊豆の秋
盃に島の唄あり独り旅
病人の向うむいたをとがめまじ

ピンセットやつつまんだ口になり
骸骨の講義骸骨横をむき
鯉節水晶の型にかかれたり
ネクタイをしめしめ喧嘩のつづきする
三味ひける姑で孫をよせつけず
誰にきいても知らん知らんという缺
筏乗り絶景のところが忙しい
恋人は刺客のようによりそうて
客間まだ之から碁盤出すという
薄情やおまへんと質屋裏返し
頭髭をしいた程の文字でなし
御近所が舌打をする家を建て
宿浴衣橋で遭いバーで遇い
帰郷してやたら名刺をくれたがり
お坊ちゃんねと女逆わず
借りに来た友とは妻にきかすまじ
応接間の金魚逆立してくれる
総入歯されど一党の首領なり
本気にするぜと男の嬉しそ
義理がたい人に元日起される
家出の娘に叱らん説と叱る説
人間味がないと悪友評すなり
カメラもう人間撮すことに飽き
伊達巻の後ろ姿へ湖が暮れ
虞や虞や汝を如何せむ四十八

川柳明治百年 (五)

昭和篇 — 「川柳雑誌」から

清白柳

昭和三十六年

一世は涙でうるむ眼で迎え
皇太子同妃殿下歓迎
 日米旗で歩道埋める十万人
官約移民渡航57年祝典
 血と汗と涙を深い皺に見る
機種決定問題
 ロッキードグラマン僕は鶴を折る

春雄
 風草
 快夢起
 忠太郎

昭和三十五年

美智子妃御安産を祝して(2月23日)
 男子だが軍人などにならしやるな
 相ついであやか組も呱呱の声
 君ヶ代の幾久しくも王子さま
 皇孫が生れ盃持ち直し
安保改正の批准迫る

路郎
 同喜
 旅風

バイトする学生デモを黙殺す
三池争論
 不逞のやから今や労働貴族なり
 意地地地花見忘れたままの春
ソ連米機撃墜
 うちとこをのぞきよったと煮え湯かけ
チリ津波来襲
 津波来て地球は狭いものと知り
ジャングルで生き抜いた日本兵
 グワム島で安全保障されず生き

白柳子
 一三天
 豊年
 好祐
 清勝

やがて徴兵母のなげきが近づくかわかつてはいても策なき世なりけり
 社会党忠治も次郎長も居ず
 岸首相いと丁寧につきはなし
島津貴子さんを祝して

路郎
 同喜
 伍健

暴力もヌマさん一人減っただけ
 追悼演説ビクビクしながらやってのけ
 沼さんに弔意株価は滴ほど
 声色もかなし「浅沼稻次郎」
 声色もかなし「浅沼稻次郎」
 殺された政治家ばかり名が残る
 機関車をたおし石ころだけ残り
越冬除雪機
 南極の犬は死ななきや帰れない
皇太子殿下御渡米
 日の皇子にフラの所望もありつらん

路郎
 同喜
 万吉
 甲吉
 沐天
 一三夫

全学連インテリやくざという怒号
 安保反対足引すって行進し
デモとストの日本

路郎
 同喜
 陽子

柳志
 快夢起

不幸にも氣も狂わずに首相いる
 私邸まで鉄条網は哀れなり
 天皇はつんば機敷でみそなわし
 母が言った総理大臣にはなるな

路郎
 同喜
 甲吉

麻雀にいてはるそうな休診日
 インタナンの鉢巻だけが板につき
 出来るなら病へストがして見たし
 葬儀屋がストをせぬのをせめてもに
今東光氏水閣寺普山式
 高僧連のおつむへフラッシュ遠慮せず
 河内山ばりで和尚は就任し
畑坑事故続発
 合の手は念仏でやる炭坑節
ソ連人間衛星に成功
 人間衛星物価が下るワケでなし
 祝電を打つアメリカの手がふるえ
 政治家は疑い科学者は信じ
大阪環状線回通
 環状線みんな試乗の顔に見え
米・人間ロケット
 金持ちのつらさは意地を張り合うて
池田さん外遊
 本店の意向をききにゆく羽田
第二宮台風
 人間の智慧が防潮堤ぐらい
 大木折れるもうあかなと思ひ

路郎
 同喜
 一瓢
 甲吉
 与根一
 七面山
 春巢
 阿茶
 阿茶
 阿茶
 路郎
 笛生

全市停電むかしはこんな星月夜

釜ヶ崎騒動

蝙蝠の嫁きに邪魔な西成署

釜ヶ崎へでも行って石を投げたい日

滅ぶものの脈搏を聞く釜ヶ崎

しゃばはいないこんな大きなうさはらし

ミコヤン訪日

恐い隣から親切を売りに来る

京都北野驛廃止

センチより地元バス代に反対し

昭和三十七年

ソ連首相発言

火を噴かぬ火山もあるにフルシチョフ

高松百から御見舞金拝受

いただく手のふるうは病気のせいだし

落語家福団治君転向

志を立てて扇をしまい込み

アレクサンドラ王女来訪

七十五着を九日で割って見る暇

軍人恩給を受けることになる

貰うては済まぬ金だが判を捺す

歌会始笠作

洗いようもない黒主や小町なり

世紀の横綱マスコミを去る

朝潮去って一沫淋し波頭

若の花引退

栄枯盛衰只長短があるばかり

大阪市名誉市民生れる

名誉市民その尊さは鑑だった

参院選終る

縁の無さそうなの許り当選し

一三夫

堰子

一三夫

晃

満潮

みのる

みのる

求女

求女

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

落選はしたが違反を待つ次点

宇宙飛行又成功

モスコの意気咳払いして放送

貿易丸〇多自由化

父一人舶来舶来云うてはる

皇太子御夫妻を迎えて(山陰)

心の旗ふって皇太子を迎え

新幹線鳥飼軌道工事

田を埋めてここ幹線の汽車走る

畑江青年ヨットで帰国

縄かかる筈の首やがレイをかけ

昭和三十八年

帽ケネディ大統領

瓦礫も莫迦に出来ない光をさえぎる

一瞬黒い霧が地球上の眼を奪った

冷戦の分水嶺に立った若々しい姿

河野建設大臣

何のその家燃かれても椅子残り

島倉千代子婚約成る

「失明しても」その一言にほだされる

社共統一候補落つ

最下位へ肅と声なき事務所なり

松川事件

神のみが知ると判決出来もせず

西陲下植樹祭に来青(東北)

あやかって林檎を植える植樹祭

天皇へ爪立ちをして孫を抱き

皇后さまのバッグを女房押んで来

浅虫水族館での天皇

天皇もほは笑む蛸のグロテスク

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

草右

ハロン旅客機遭難

泣け遺族天候はいたずらものだった

北陸豪雪

大雪の下で科学も死んでいた

積雪一寸その下の金魚の朱

豪雪になるぞとネギはキロで買い

豪雪がラッセル車庫にとじこめる

豪雪の世界へケロリと月が出る

人づくり(池田首相演説から)

宰相の今更おそい人づくり

人づくり儲けることと抱き合せ

違反した人が唱える人づくり

人づくり教育勸語見直され

転んだら起きるまで待つ人づくり

今までは何しとったんや人づくり

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

路郎

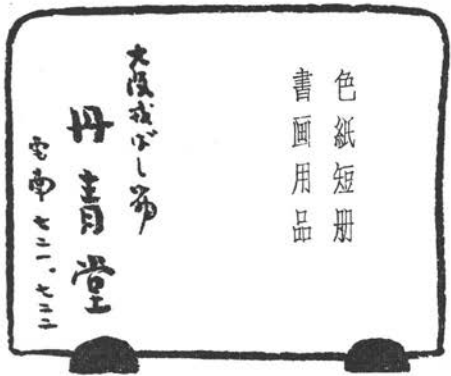
路郎

路郎

路郎

路郎

路郎



バカンス

妻のバカンスあくる日は寝てしまひ

愛鳩

スモッグ

スモッグが今日はなかった初荷着く

十九平

小さな親切運動

小さな親切して遮断機慌てたり

静水

子の日記小さな親切見つけたり

独仙

拜路池田首相殿

汲取の不平拜路市長様

三司

悪書追放

「悪書追放」それから悪書ばかり売れ

晃

無責任時代

無責任時代おもちゃの手錠出来

方大

ケネディ大統領暗殺さる

残業残業大統領の死も知らず

素身郎

陣笠もそれから撃たれた夢を見る

どんたく

山口国体散見

マスゲームお師匠さんを見直す日

半休

昭和三十九年

三井炭坑事故

茶昆の煙三池の月もけぶたかろ

柳志

人命の噫々もぐらもちに似て悲し

与根一

鶴見駅列車事故

又一つ地蔵が増えた鶴見駅

柳志

原色でなくてよかったテレビニュース

涼人

大阪城に水を張る

頼もしやお城に水を張る市長

圭井堂

力道山の死

シヨーでない暴力リングの外で鳧

電眼子

小杉放庵逝く

星が流れたあれは放庵だったのか

路郎

小判五千万円掘り出す

十円も出ぬ土地ばかり持ち合せ

むじな

吉田茂氏訪台

東洋の頑固同志の話し合い

旋鳳

ライシャワー刺傷

あやまると言わず遺憾の意を表し

みのる

春闘

我儘に育てヤンチャをもて余し

五朗

新幹線試験

三人掛の中の座席にチト困り

杜的

御巡幸を迎えて（新潟）

天皇ヘカメラを向けただけで過ぎ

不二

学力テスト

言うことはあるなと思ひ採点し

曉童

松山の暴力団

坊ちゃんの街ロケでない弾丸の音

宵明

佐藤春夫急逝

詩心不老近くとも知らず美神の句

章雅

在日鮮人

外人手帳デートに忘れてはならず

清生

芥川賞「されど我が日」

インテリはセックスにまで理論づけ

多久志

山陰洪水禍

絶望の河原となつて見たたされ

緑之助

冠水の南風魚雷の浮いたよう

代仕男

人力の脆き水魔は嘲笑う

独仙

雨止まず有線放送避難指示

晃男

オリンピック

オリンピックで下痢気味のジャパン

路郎

表通りだけは五輪の道が出来

静馬

家族みな五輪切手の列に居り

酔夢

★六月号25Pの「陥落にジョホール王も巾が利き」霞乃一とあるは別人のため訂正。

オリンピック戦飯れと友が呼び

紅溪

学校も五輪音頭で運動会

句楽坊

老記者か呉越と書いた選手村

文庫

オリンピック鳩の行方を見守りぬ

いわを

金メダル風呂の中まできこえて来

梅志

何個かのメダルと劣等感を得る

清生

金メダルこの国もこの国も地球儀を廻す

章雅

聖火

光陰は原爆の子が聖火持つ

一征

聖火の通る道にはつんと犬の糞

秋星

子等真似る聖火リレーに赤トンボ

鈍愚坊

聖火追い越して台風京に入る

八九寸

聖火運ぶだけのコーチも選ばれる

草右

聖火消えて株の下るのだけ目立ち

可住

円谷力走

上がる日の丸そして国歌ヘンと来る

無鬼

マラソンの期待へ市場客が切れ

好祐

アベバばかりの画面へNHKくさす

日満

ひた走るアベバ仏陀の相に似る

薫風子

マヤ帝国の裔がはだしてゆく舗道

清生

ガルナメンの独走

スポーツマンシップが後から独り三周す

無鬼

メダルには目もくれずビリゴールイン

旅風

体操

チャフラフスカアウナシサーも舌もつれ

女体とは斯くも美し床競技

同

昭和四十年

滋賀県にニコヨン町長生る

ニコヨン町長でなもんや

ないかないかと唄いそう

学生長髪問題で騒ぐ

長髪もよからん神武の末裔さ

池田内閣辞職

うんざりの世相へ池田辞めてゆき

これも五輪記念か池田さんが辞め

政權交代

がん首を替えて一服菊かおる

佐藤首相初答弁

胸張ってみても古兵には勝てず

フルシチョフ解任

世界で一番エライのが誠になり

フ首相お年で辞めたにして置こう

原潜来る

やがてそれ尊王攘夷がまたきます

大松精神を説みて

なせばなるとは言えなさずにならざりき

ベトナム

青春のはけ口ベトナムへ行きたし

ベトナムの遠味段々近くなる

パラリンピック

美智子妃にパラリンピック握手され

ケネディ刈り

ケネディ刈り尊敬している訳でなし

枸杞はやる

枸杞党になった理由は安上り

李ラインもめる

李ラインは通用しない横車

アンブル禍

アンブルの恐怖富山で我慢する

雪山讃歌

死体もう雪山讃歌唄わない

首相渡米

首相渡米野党の幹部くへへ来る

インター・制所廃止要求

これがまア医者その卵か日焦けして

NHK太閤記スタート

サルに似ているのが配役すぐさま

山陰へ行幸啓

お車を入れて一枚撮ってくれ

オラが村へも来て下さい陛下様

秀峰へ一さわ高くお野立所

倒産旋風

済まぬとも書かずシャッター降りたまま

吉原事件の父母を想う

花嵐喧一陣の夢の間よ

担当刑事の涙みんなの涙とも

各界の巨星について追ふ

将棋倒しに計を聞くも秋 淋し秋

大物に魔の年 昭和四十年

台風二十四号来る

おつき合いうちの瓦も飛んでみせ

三ヶ根山脱獄七士の墓

あめりかの見える丘あり七士の碑

昭和四十一年

健康改正

薬価値上げ算術を勉強し

クコブーム

枸杞植えて療養目下長期戦

石ブーム

カツキ屋も食指動かす石ブーム

散歩ですなどと河原で探す石

石ブーム野仏の顔と見こよう見

私全日空機遭難

遺体眠る強風波浪注意報

天国へ行くのに海底に放つとかれ

飛行機へお守つけて乗る弱気

議員問題

党籍をはなれただけでケリがつき

ラッシュアワーに善処

運輸相時差出勤でお茶にごし

静馬

独仙

静観堂

どんたく

滋雀

一栄

美文

美文

八郎

旅行・宴会・リクリエーションのことならどんなことでもご相談ください。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田 4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通 2-18

三洋電機 本社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

ボーイングの事故

見納めの富士になるとは誰れ知らず
フジヤマも君には仇となるばかり

私鉄スト要結

鳴動の足して二で割る式の智慧

鉄道運賃値上げ

終身パス持って値上げへ驚かず

市川団蔵が逝く

法眼も髭の意休もなく独り

団蔵の心海だけ知って居る

通信費値上げ

値上に反抗し三十日に投函す

熊沢天皇死す

この世では咲かぬ苗木を持ち合せ

テレビ「ただいま十一人」

百出の議論親父が出てまゝ

稲作況報告

農林省自分が作ったように云い

運輸大臣辞任

荒船に浮世の波は甘くなし

新国際空港の位置きまる

三里塚へ四年がかりで辿りつき

大阪市電廃止路線ふえる

淋しさは市電のレールだけ残り

昭和四十二年

松山YS11号墜落

神様のミス大安に大惨事

また事故で来たかと閻魔多忙なり

松山沖の方向か合掌す

竹 莊

宿帳がまだ来ぬ客を待ちつづけ
肉親を思う花東波にゆれ

草 右

秋田 実主宰・不二田一三夫編集
はじめて出た 漫才の月刊誌

「漫 才」 八月号

(送料共) 百三十五円

彰 男

洗濯もせずに襟だけ糊をつけ

法泉子

三太郎先生受賞

建國記念日設定

七面山

三 司

日本もやっと生れた日が決まり

良 夫

理屈など抜きで二月は良い休み

天草の五色の宝

柳 慶

露 芳

百万一心自粛し給え雪の中

半 休

選筆東正

万が一の心自粛し給え雪の中

靈眼子

一 保

冷めしの味を泌々噛みしめる

鉄 舟

合併・倒産続く

地下鉄二号线開通(大阪)

柳 慶

涼 人

谷町に昭和の電車がまた走り

誓 二

国会で流行

お人好し代議士音頭歌わされ

紫 光

独 楽

共和製糖管氏保釈

法泉子

健保改正・薬代一部負担

五千万円で国民の面を撫で

雄 声

雄 声

はかない抵抗業を貯めておこ

史 好

平野大念仏寺万部供養

稚児の顔エレキを真似る子と見えず

頂留子

布 堂

一世の目にプリンスのソフト帽

柳 志

皇太子南米訪問

コロサニ二世号

阿 茶

良 夫

精神一到嘘でなかった二万キロ

阿 茶

漫才作家の登竜門・週刊誌や各紙で激讃

(送料共) 百三十五円

露 芳

露 芳

炎天に出たがミミズの命とり

旭 童

業者だけ立てばよろしい運輸省

早抜六十日

竹 青

露 芳

降りそうで降らない空へひとりごと

す き

水けんかする種もない池の底

木犀の香りひでりが憎くなり

季 生

静 波

早抜へ水車は音もなく止り

梅 志

国葬の日よワンマンのかおかたち

地下鉄四号线一部開通(大阪)

与 呂 志

与 呂 志

サービスは大阪弁で開通し

快 夢 起

ヘンリー・カイザー爺造く

寿命には勝てず事業の鬼は逝き

多 蘭 子

多 蘭 子

土地買いに来たらし納屋の隅に逃げ

一 雲

学生騒ぐ

国会を真似て法政深夜劇

(おわり)

痴盲録

高 鷲 亜 鈍

川柳塔常任理事会

七月四日六時から常任理事
会が本社階上で開かれた。

路郎先生三周忌句会の最終
的打ち合わせや、八月三日の
本社句会が上本町四丁目の天
性寺（てんしょうじ）を新し
くホームグランドにすること
を句会部から報告された。

近鉄上本町六丁目から徒歩
で五分という交通に便利、か
てて会場は華麗そのもので、
かならずや好評を博するもの
と句会部の鼻息は荒い。

出席―白柳、好郎、形水、
多久志、文秋、小松園、生々
庵、葵、一三夫諸氏。

大阪文化祭川柳大会

ことしの当番は川柳塔、川
柳文学、瓦版の三社で、この
打ち合わせを七月八日におこ
なった。塊人、三碧、光穂、
小松園、白柳諸氏出席。

期日は十一月二十三日、所
は中央公会堂三階集會室で、
兼題は「公会堂」好郎選「文
楽」塊人選「読書」宣介選「
あいさつ」俊作選。このほか
に雲雀選があるが題未定。詳
細は決定次第本誌発表。

触れざればわかるはずなきストリップ
頭まるめた座頭市もえらいもの
音なしの構えでそろりそろりいく
くちびるが歪んでいても話しくみ
盲人の演出をしてきょうを生き
どうしてもおもいだせない顔うかぶ
盲人のみらず正視者も扶けたい
生きるだけで一っぱい盲はほっとく
孤独です子供や妻の母がいて
正視者の立場で云いたいことだらけ
邪魔にならない小石となっておりましよう
大きくなるな小っちゃくなあれ人しれず
大きくなるな小っちゃくなあれ小石のように
手応えがしてからすすむ杭のあと
生まじっか生きているから無視される
春夏秋冬わかっていてもわからない
盲なら盲で名のある者になれ
天と地の間で泣いたり笑ったり
現実はいきびしテレビに観とられず
あの人この人便りしたくとも出来ず

トヨタ自動車指定工場

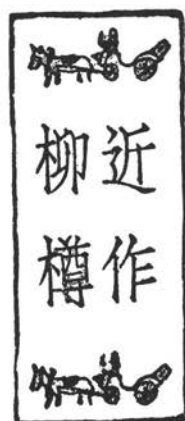
自動車販売・修理・板金・塗装

三和自動車工業(株)

代表取締役 八木 摩 天 郎

堺市大仙中町 5

電 堺 (41) 2 6 8 5



若 本 多 久 志 選

大阪市 梅園摩耶

身ごもつてこの生涯の重たさよ

ばら香う身のおきどころなき悪阻

人の和はうすき刃に立つ如し

ためらいもなく素足にふれる波

兄となる子へはほ寄せてはほよせて

松江市 鈴木 壮樹

療食所再入所

身のほどを忘れかけてた三年目

「やくよけ」も信じ四十二のまよい

半坪のベッドで半分いきている

消灯のチャイム星が流れゆく

鳥取市 近藤 秋星

悩みが一杯おれはにんげんである

人生の疲れに眼鏡ずり落ちる

五十音順なら僕のほうが先

まだ照れるだけの若さが残つてた

姫路市 前田 芙巳代

愛語温める翼はすでに斬られていた

シグナルに賭ければ赤の多いこと

人生も脇役のまま女A男B

母呼ぶ笛が鳴らない少年とまどいて

豊中市 河本 雪男

ビジネスに旅情は無用ひかり号

ミニの足組んで女の自己主張

耐えることだけが人生とは淋し

子の寝顔働くことに悔はなく

小松市 四方 天弘美

仲人に義理があるとは弱い俺

裸婦像を正視出来ない気の翳り

不景気にジェット音だけ騒々し

凡人は幸せだなあ妻よ子よ

名古屋市長 谷 洋 月

一点を凝視する眼もプレス工

はがゆさを炎と化して女去り
一徹の父赤バラにさからわず

うつぶんがとけず無口のままだに酔い

竹原市 三 宅 不 朽

お見送り意中の人は遠く佇ち

胸のすく洒落が末席から返り

雨だれのぼっぱっぱっぱっ無心
いいつのる男かなしきのどほとけ

羽咋市 三 宅 ろ 亭

離村した空家の前の水清し

八尾市 古 川 鶴 声

首を伸ばしてひまわり陽を迎え

空気 水 田舎の土産持たされず

人生へ疑問符つけて日記かく

七尾市 松 高 秀 峰

値上げした度に禁煙誓って来

追伸の方に用件書いてあり

ポーナスが出た顔で来る飲み仲間

すぐ赤くなる父ちゃんで親しまれ

泉佐野市 大 工 チ ヨ

長尻の厠で今日のプラン練る

五百万掛けて空路の日本晴

仏前へ私も姑になりました

馬鹿馬鹿と云われて六十路間近なり

大阪市 小 谷 葉 子

ダイヤワンカラット女のいくさ知る

たわむれの恋 鮎の命かも

かなしさは孔雀のおんなうす汚これ
白髪もう恋愛論にゆきつまり

一応は名刺を貼って同棲し

胃と口の意見が違ふ冷ソーメン

孝行は難く一徹へ合す無理

白衣着て婦長師範の花を活け

もう一度握手をさせる程に酔い

鎌にぎる夫婦同じ色に焼け

妻の声受話器の中ですべている

米子市 八 木 千 代

廣島県 高 橋 鬼 焼

東大阪 坂 東 若 芽

大阪市 和 田 痴 亭

言い勝った夜から流れる溝ひとつ
疑ってくれる妻あり帰路をせく
運命線信じる^耳を守り切る

米子市 林

瑞 枝

恋だけで終って良かった古写真
免許とるママを木蔭で子がみつめ
無駄づかいした日空虚な夜に堪え

鳥取県 鈴

木 村 諷 子

カーテンを吊したように女着る
としよりの部屋へ下ってホッとする
六十でまだ社会科を勉強し

倉敷市 藤

井 春 日

交換台秘書の知らないことも知り
定年へご慈悲囑託の名でつなぎ
事務に馴れ化粧に馴れて正社員

島根県 小

砂 白 汀

常識の重さ手も出ず足も出ず
理解してもらう気のない無抵抗
神棚があり共産主義でなし

守口市 岸

本 豊 平 次

部課長は立つ潮時をわまませる
電話先も舌を出してるかも知れず
良心より信用されてる三文判

父の日の吾れに誇れる過去もなし
過密都市信じたき顔の一つなく
父眠る海は何処ぞ墓碑もなく

大阪市 江 城 功 雄

呼び戻す声を待ちつつ拗ねて出る
抵抗は見せず日記は素直なり
横断路よその子のため手を挙げる

宇部市 櫛 部 い さ 夢

貯めているマダムに別な影があり
おくそくの女ごころにある嫉妬
愛されてからは上手にウソも言え

八尾市 宮 西 弥 生

逢えぬ日の吐息に沈む角砂糖
どん慾に溺れ砂糖壺の蟻
雄蝶の陶酔排ばたんの褥

広島県 岩 谷 二 三 枝

かみなりを寝床できいて春はよし
叩かれて叩かれて我人となり
三人の子持と見えぬスラックス

大阪市 堀 口 欣 一

梵鐘の余韻の中の観世音
新緑に濡れて茶室へつくく怪

出雲市 竹 内 李 朋

慇懃な別れ飲屋でまた出合い

羽曳野市 榎 本 吐 来

貧乏をたのしきものの中に入れ

大阪市 奥 川 継之助

万博の入場料は調和欠き

正直と真面目が馬鹿にうつる日々

島根県 堀 江 正 朗

思い切り額叩けば蚊は居らず

指先の感を狂わす気のおせり

悔のない一歩一歩へあせるまい

島根県 堀 江 芳 子

見えぬ目をこすって夫の朝がくる

もがいてる蠅へ一茶の気にもなり

ほんの五分肩揉み合うてからのお茶

大阪市 河 内 屋 源 七

家のある嬉しさやど蟹這い廻り

夕涼み一茶とおなじ句が浮び

薬石効なく二号さんの狎

下関市 志 賀 木 石

人かなし立場立場で身がまえる

浅学菲才本当にそうお思いか

ドンファンと知って惹かれるのも女

八尾市 高 杉 鬼 遊

母の死は小遣い一銭くれた頃

おどおどと税務署の椅子浅くかけ

負けてたまるか男赤いシャツを着る

がむしゃらに生きて自叙伝にもならず

四十の坂で格言からまわり

しあわせは母の口紅知らず生き

なを言うつもりか眼鏡拭いている

残り汁でヒジキなど煮る妻であり

歯がゆさは進歩的という裁判官

旧友がわが家へ革命置いて去に

何気ない素振り心の溝を知る

たかが歯の一本五体みな疼き

妥協する智慧をにがくも思うたり

鍋持って冷奴のリン追っかける

ひと理くつあって女房は朝寝なり

言うは易し然しと紫煙考える

祖父他界す(二句)

あの星が祖父かも知れぬ掌を合わす

さらばさらばとけむり緑の山を這い

鳥取市 川 崎 秋 女

堺市 斎 藤 亜 也

藤井寺市 古 結 百 水

竹原市 森 井 菁 居

— 35 —

青森県 岩 淵 一 星

スキー場のリフトが錆びて郭公鳴く

巡察のように時々母が来る

公約をふやし選挙に身構える

和歌山市 増 田 次 章

家計簿にひびかぬほどを昇給し

丸くだけ生きて自分を見失い

契約をしてから他人の意見きき

呉市 榎 田 英 詩

お喋りと別に団扇は児を扇ぎ

ブレーキ音の不吉へ元氣な児が帰り

給料日妻の苦情も中休み

大阪市 河 原 林 比呂路

補聴器をはずし本当の俺がある

ライターの点滅小言きいていず

思いつきは褒められ金はことわられ

熊本市 高 野 宵 草

ふるさとに似てる景色へ足が向き

襟足の白さへ夏が匂って来

「お父さんおはな拭きなさい」とママゴト

新居浜市 村 上 水 軍

悲喜乗せて別府航路の灯は淡し

この渦に沈んでしまえと投げし愚痴

雲妖し出漁見合す浜の声

竹原市 時 広 一 路

利害一致したときだけの掌を握り

きれるとはかくも非情な人なるか

血圧が少し上った顔となり

高知県 山 川 勝 子

野菜暴落牛馬も豚も皆んな肥え

三顧の礼そんなの知らぬと中三生

愚息でよかった暗殺されずすみ

大田市 藤 田 軒 太 楼

同伴へ時には妹の仕草させ

化粧する妻を待ってる煙草の輪

白紙ですと新任マイクへ低姿勢

京都市 明 嘉 彦

つきかえすつもりの方が媚びるよう

考える無駄を承知の目をつむり

草に腰下ろして郷を語り合い

大阪市 太 田 里 栄 子

旅先の宿で留守気遣うも妻

ありったけの伝言書いて妻の旅

ストッキングのねじれ気にせぬ古女房

岡山市 行 吉 照 路

職場ではトラブルおさめ家で揉め

便箋一枚辞書を二三べん
もう去ねの欠伸に負けまい借りるまで

島根県 志 賀 美 栄

手の節をなでて波乱の過去にふれ
たわむれの指切りの日の愛遠く
うす紙をはぐ切なさで恋が癒え

島根県 榊 原 加 代

陽が一杯しあわせ一杯ふとん干す
脊信の涙へ赤い夕陽落つ

なんとなく泣きたい日なり雲かける

長野県 中 尾 愛

五十才の誕生日なり我れ孤独
弱き身に茨の道のけわしかり
明け方に出征された夢を見し

京都市 藤 本 征 山

ほろ酔えばちよいと父にもからんでみ
美に弱し親にもろうた鼻も変え
読書家らしく全集並べたて

岡山県 武 元 柳 子

日焼など恐れて米が作れるか
エプロンに包み隣へ柏餅

何をしにめくじ干乾になりに出た

鳥取市 藤 本 和 宏

ほほえみをうかべた父の寝顔好き
生きる為又鶏が焼かれてる
アルバムに僕の知らない僕が居る

河内長野市 森 本 黒 天 子

むしり取られてもやっぱり土へしがみつ
歯並み揃って明治の流れ汲んで生き

尼崎市 平 井 露 芳

十年の遅れを埋める気の門出
相抱く闇へねずみが今晩は

東大阪市 竹 中 肖 二

事前運動と覚しき匂いのハガキ来る
父の日というのが出来て朝の風呂

東大阪市 竹 中 綾 女

夫と二人くらわんか船の鉢を賞で
早出した夫ねぎらう夜の膳

京都府 菊 沢 破 天

里の母大そうな風でかしこまり
やせた頬そつと里親聞いてくれ

岸和田市 津 田 千 舟

義弟昇進内定

重役の椅子も間近かで夢多し
引越して来たお隣りも子沢山

大洲市 堀 内 曉 風

談論風発ビールの泡をつけたまま
思慕つのる男へ妻子あるを知り

北九州市 藤 田 独 楽

求人難の世に失対の事業あり

入浴だめも出来ぬに風呂代又あがり

東大阪市 坂 上 山 椒 坊

子の頭撫でて再婚ふみきれず

アルバム of 亡夫と語る春のどか

守口市 田 中 笑 風

天ぷらが大好きという祖父達者

安まつせと屑屋は釘を打って買い

出雲市 王 紫

運勢欄の通りになる日不思議がり

器量よい順にパチンコ屋を罷める

新潟県 高 野 不 二

一人旅期待むなしく夜がふける

辞めさせられる通知願いによりとあり

八幡浜市 別 宮 す き

テレビでも言うてましたと妻強気

先着順私の番に売切れる

諫早市 原 田 明 春

特売場社長夫人の顔もみえ

特売のミニは少うし短かすぎ

寝屋川市 福 富 隆 子
そむかれた父ビヤガーデンの客となり
計量器に乗せたトマトは高くつき

尼崎市 中 溪 慶 彦

おしきせの答辞も読ませ入社式

人格が社長にさせた訳でなし

出雲市 山 本 朱 紅

思春期へ我が血統を知らぬ犬

ハネムーンの窓へ羽田は小さくなり

松江市 永 原 鳳 人

失意の日つづく療舎の五月晴

人生のコースを療舎へ廻り道

松江市 鈴 木 杜 樹

ひとまわりふとって妻の世帯じみ

邪恋すべておわり道路の無縁仏

河内長野市 井 上 喜 醉

盛上るファイトへ老骨空廻り

どん底の生活に今日も雨が洩り

八尾市 高 杉 千 歩

愚かにも悔さえなくて凡々と

半跏思惟菩薩ひそかに笑み給い

八尾市 高 杉 力

昭和元禄浪人散乱す

よく当たる生徒につゝる嫉妬心

石川県 分 狂 興

テレビの声大きい時は留守と知れ

一級酒一合にせよ妻指令

愛媛県 嶺 本 満 子

七人の敵へスキのないシルエツト

この胸へ同居したがる人がある

京都府 福 村 飛 龍

いざと言う貯金にしては少な過ぎ

信心が足らぬからだと病みつづけ

大阪市 中 沢 風 太 郎

コーヒーのたった一杯札が来る

暖かい硬貨で菓子を買いくる

大阪市 西 本 保 夫

ZD運動へ住友の看板

スケジュール通り組合妥結する

和歌山市 ふきあげ 虎 城

半額の頃の旅行はうろ覚え

ひょいと出たプラン覚悟がまた迷い

大阪市 田 中 多 幸

お迎えを待つ念仏が葉呑む

俄か雨他人の傘へ素直なり

鳥取市 有 田 鹿 の 子

母と子の愛の掛け橋遠すぎて

メーデーの列よ平和を願うのか

広島県 南 条 露 声

あの頃の若さが匂う訪問着

冗談の底を読む程ずるくなり

竹原市 出 島 静 波

呼び水となって怒りが治まらず

義理欠いたつばめでいつか来なくなり

米子市 源 氏 勝 久

子の夢はノートの端の漫画にし

心中のあった城山つつじ咲く

豊岡市 不 二 本 和 久

うら若いように子供が画いて呉れ

蒸発をするよと息子におどかされ

鳥取市 藤 本 鎮 也

魚屋が提げれば跳ねてるように見え

いい先生だった卒業して五年

鳥取市 藤 本 恵 子

朝あけにまだぼんやりと工事灯

餌をはこぶ蟻と遊んだ一時間

鳥取市 藤 本 佳 女

間違えた電話へ火葬場ですと切り

どうしたことか痴漢と間違われ

鳥取市 谷 尾 透 風

駆け出しの記者ベテランをマークして
他人だから打ち明けられぬ事も言え

大阪市 影 山 啓 吉

病みあがり者に世の中歪んどり
口びるに似てるいちごでおいしそう

出雲市 安 井 寿 年

美しく嫁ぐ春なり伯耆富士
別離傷心鏡に君の笑顔浮く

姫路市 大 久 保 大 夢 子

倒けた跡見ればラムネの玉一つ
柔かい茄子下肥とは言わず

宿毛市 瀬 田 美 知

波うつえりあしたしかめて見たくなり

大阪市 藤 田 頂 留 子

お隣りも湯豆腐らしい特売デー

尼崎市 中 谷 利 美

延着を詫びるマイクの不親切

泉佐野市 大 工 静 子

ヘソクリの置場言うとかく年になり

鳥取市 河 口 忠 志

ドラマ見て涙している妻純情

島根県 大 森 孝 華

新緑へ匂う一単の肌ざわり

堺市 細 川 曉 年

若鮎がピチピチはねる水飛沫

竹原市 生 信 笑 子

歌もよし夕焼け小焼け恋もよし

大阪市 加 納 楽 々

不言実行で失敗くりかえし

鳥取県 中 川 定 人

世帯主だがままならぬ父達者

大阪市 有 信 吐 痴 男

眠っても起きても仔犬丸くいる

鳥取県 北 野 天 人

病みしこと秘めて老母に返事書く

大阪市 岡 本 まさひろ

飲んでます毒にならない保健薬

香川県 西 山 綾 子

手術台すべてをまかすハンコ押し

米子市 河 瀬 茂 人

農薬を逃がれたように螢飛び

出雲市 三 島 平 吉

同病を憐れむ人に愛が出来

出雲市 飯 塚 全 喜 知

松江梅里

一周年追悼句会

会場大寓——六月二十日

故梅里さんへの追慕と好郎氏の兄弟愛に六十余柳人が集った。生々庵主幹はじめ故梅里さんの思い出ばなしが尽きない。遺族の方も元気で営業は盛大である。靈よ、安らかに。南大阪川柳会の六月句会のカップは不二田一三夫氏が獲得。

(文秋記)

席題「生け花」

(三才と軸だけ発表)

内藤ささ子選

水盤に盛られてアジサイ雨を恋い あいき

弓削川柳社創立20周年記念

第20回 西日本川柳大会

九月八日(日) 午前八時半から(前号を参照) 本社から兼題選者に中島生々庵主幹や長野文庫氏(本社同人)が席題選者として出席。川柳塔からは一人でも多く出席していただきたい。

大陸柳人同窓会(第四回)

時 四十三三年九月二十二日
所 奈良いかるが荘(奈良県生駒郡いかるが町竜田六八二) 電話—いかるが局2

生け花の許し名不判な名をもらい 眉水
草月流庵の気性に似ておかし 葉
太い手で花をなおして叱られる

席題「小唄」

西尾

葉選

褒められる小唄段々金が要り 千葉
幸せな人だと思ふ小唄聞く 水客
小唄まで習うたのに左遷され 柳志
雨だれにならあうという小唄

兼題「客足」

小川

恒明選

迷子まで出た客足が忘れず 一舟
客足が明日の仕込みをぐらつかせ

兼題「氣前」

金井

文秋選

ええ氣前国の詠りのままでよし 葉

991番。

費 千円(会場費、記念写真、懇親会費)

第十一回近県川柳大会

市制十周年記念

日時 四十三三年九月一日
場所 呉線竹原駅前、三井会館、徒歩三分、
中、四国海上一時間十分、フェリー

発着港より車で三分。

兼題・ボール箱・丘・味・潮騒・素足・月光・素直・声・直線・投句先—広島県竹原市竹原町田中山内静水宛。

氣前よう撒いて汚れた票を読み 滋雀
氣前よい返事へ妻の目が押え 笑痴
氣前よく店を持たせてからしほり

兼題「女」

菊沢小松園選

きつちりと座っておんな石になる 水客
味噌汁をほめられ女縁遠く 洋敏
離婚してそれから女とりもどし 一三夫
いつまでも女に齡がつきまとい

兼題「命」

川村 好郎選

天職に命を賭ける目が清し 一三夫
哺乳瓶精一杯に吸う命 花梢
雑草のたくましい命しつくりの割目 あいき
今朝も又目ざめたり命あればこそ

新発売

水にならな
ライオンペン F-50



水性超細字用

ライオンペン F-50

黒・青・赤の3色
1本 ¥50

福井商事株式会社

奉天柳人太平楽

東野大八

昨年夏のこと、川柳大陸同窓会で、一人の佳人の成れの果のようなおぼさまにぶつかった。天満千代ねえさまの御紹介を頂いたら、その人は小さい角丸の名刺を僕の手の平にのせてエンゼンと笑った。香蘭原田美重子とそこにある。大陸はどこで？とさくと

「奉天、奉ビルグルリ……」
とおっしゃった。と申しますと？

「ボクのうちーのママなの」
トタンにこの半白の老鬼、たちまちカーツとおでこが熱くなった。

「アイヤ、マー、ボクのうちのママ？」

「ボクのうち」とはバーの名前で、当時、奉天ビルグルリ（グルリではない）のバー、のみ屋街の中に君臨した超デラックスのバツカスの本拠だ。

「そのときのママが貴女？」

「そうよ、寄る年波には勝てませんで」

しなしなと、その年波が左右にゆれた。あ、あのママが、僕は無量サク然として、ハリのようアゴ下の白毛をなでた。

当時僕は、奉天の盛り場の一等地、春日町をちよいと入った春江ビルの上階に果食していた。窓をあければ、やき鳥屋が見える——というたの文句通りの場所、で、チョンガールの一人住いには毒気がきつすぎて、むしろ、ゼニなきときは煉獄の独房に似ていた。時にボクたるや芳紀二十三歳。ボクのうち「は、そうした当時、マスコミのメッカで、昨今かけ出しの私など、そこにいるかともいわれないほど、しけたわらじ虫の如き存在であった。だから、先輩、中輩の頭ごしに、月光ボサツさながらのママを仰いで

「たとえ一晚ヒトキでも、こういう女とユツクリ話がついてみたいなあ」と紺屋高尾の久蔵の二番せんじを地地いって

いたわけだ。

そのプリマドンナが小ジワあつめて目前に

いる。なんと花の生命のみじかきことよ。

「敗戦と同時にソ連軍が奉天に進駐、その兵隊たちの慰安所が、グランドカフェーのあの銀鈴」なの、その私は所長になつて……」

こういう女ザムライが川柳人のグループに現われるということも、時よ、時節か。

このソ連ママの奉ビルグルリの軒並みの一つに「マスコット」というバーがあった。そのママがまた絶えなる美女だが、残念ながら勤め先の社長の二号。ある日お手当を持参したら、イングリッド醸造のスコッチがでた。そのとき相棒がくっついていた。

「この方は？」

「大木発夫、僕と同じ川柳人」

ということで大いにモテた。店の娘の一人に高杉早苗（当時の映画スター）にウリ二つの美人がいて、ボクの相棒は忽ちイカれた。爾来、安ボマードをてらてらさせて、春先のトンドみたいな顔で毎日のように僕のアジトへやつてくる。そして、その店へつれていけという。

何を隠そう大木発夫とは僕のインスタント命名で、彼は満洲人である。本名王義發。奉天省公署の通釈官である。

「お前、連れて行って貰いたかったら川柳を作れ。でなきゃ身元をバラすぞ」

かくで「おでん屋は湯気の中にて燭がつき」というダ句が苦心サンタンの末出来上つた。それを奉天鉄道総局の石原青竜にみせると、けだ歴史的漢民族最初の川柳だ、と折紙をつけてくれた。当時、青サマは満鉄機関誌「同軌」（漢文）の日満川柳交歓で懸命の折柄であつたので、相好をくずして喜んだ。

その青竜が、奉天切つての名川柳家は宇和川木耳である、一度訪ねる、といったので

出かけた。加茂町の、とあるもの寂びた裏通りのしもたやの一軒。顔の長い、鼻目秀麗の中年男が、後日マツッカーサーがくわえた竹製のコーンパイプみたいなのをくわえて、私は番傘でして、といろいろの御高説を拝聴したのち、青い色紙を一枚くれた。

力ある眉をうつした日本刀

水府

とそこに書いてあった。大枚二円五十銭の丸額を張り込んでそれを部屋につり下げた日、借金取りにきた千日仲店のさるおでん屋のお女将が、コレ頂戴、かわりにお店でタタ酒のサービスをするから、とたちまちはずして小わきにかい込んでしまった。根が意地が汚いので、そこに居させた鶴崎一芥と顔見合わせ、ではこれより早速、とついていた。

一芥という柳人の親分は井口呑湖という馬が山高帽をかぶって小田原提灯をくわえたような、壮年に長い顔をしていた川柳人だ。奉

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

百年の落差の底にある平和
切り売りの旧家廂へ追い込まれ
子はみんな達者逆境へ腰を据え
禁酒して賭ける意地で押し通し

大洲市 米 沢 暁 明

本名は知らず愛称だけで酌ぎ
ほんとうの夕陽へ外すサンガラス

天職業紹介所々長で、奉天毎日の柳壇の選者をしていた。一芥を通じて僕も子分みたいな顔付で通っているうち、*「呑湖句集」*というのをくれた。馬とみまがう似顔絵を宮尾しげが書いている。どうだ、いい句集だろうとイバっている。

「この宮尾しげをがあす奉天へくる、すまんだどこか案内してくれませんか」というので、漫画家の佐久間晃というのを、青葉町のミルミルカンカンにつれていった。アラブ諸国の首相みたいなカタカナだが、男と女の実演の即製満語である。演出者は洋東天(車びき)と野鶏(街娼)で、当時は奉天の夜の名物の一つで、一種の観光資源でもあった。

「あんな汚いものより、玉の井の花電車の方がすごいよ、玉子やバナナや銀貨が小道具でね。こいつは頂けますが、今晚のはネエ」

有り難い仏像にするのは暗さ
家計簿へかあさん赤ペン貸しましよか

小松市 山上千太郎

植木屋の廻りも家が建ち混んで
挨拶も初夏のさわやかさにふれて
残りもの捨てるかどうか嗅がされる

和歌山市 秋月 宏 方

パパに似てるママに似ると平和な日
一億もあるのに二号にも産ませ
働き通す軍手思えばかわいそう

しげを先生、大いにそういう感想を述べて鼻の穴をほじくっていたのを昨日の様に思い出す。青い協和服のよく似合う、青年漫画家、といった感じで、それからどこへしげさんだか覚えはない。

一芥という殺し屋みたいな冷たい金ぶち眼鏡は、妙なコレクションをやっていた。ある日、古ぼけた柳行李を示して、これが苦心のそいつだよ、というのでフタをはねるとすべてエロ本なのにはキモを潰した。

エロ本といえば、当時、満鉄社員の春本クラブ事件というのがあった。足がついたのが「延寿経」という中国古典のほん積本で、そのモミ消しに僕は活躍したことだが、その主謀者が、名前には実存中なので預るが、レッキとした川柳人。

「お前、あの珍本の釈者は誰だと思っ、山口文夫だぞ」

その名をきいて私は愕いた。山口文夫というのは、当時とぶ鳥も落す勢いの李香蘭の実父だった。何はともあれ無事落着くと彼は謝礼の意味で、背丈ほどの染筆をくれた。

「秋くれば鉢のざくろも紅葉して落葉しにけりその鉢の上に」

「なんだこんなもの、おれは歌人じゃねえぞ」

「歌人が川柳を作る、これぞ詩川柳の開発ではないか、このうたは与謝野晶子の激賞した作品だ」

私はそのトンチンカンな御染筆を、その足で水府色紙の女将のところへ持ちこみ、ビール五本をせしめたことだが「何んといって売込んだのか覚えはない」。

秀句鑑賞

—前月号から—

後藤梅志

一列にこちらを恨むメザシの目

(甲 吉)

作者は産地出身の人であろう。こういう句は、見馴れた人でないと、ピンと来ぬ。

串に刺したメザシは、夥だしいイワシの山から、忽ち手ぎわよく生産されて、何の感傷も湧かないものであろうが、干し揚げたメザシは、皆、一様にこちらを睨んでいる。目が異様にかがやいて、恨んでいるかのように。こうした実感から湧いた句であらうことが察しられる。おおせいの手を経て、消費地へ配られては色もさめ、イワシの表情もいささか生彩をかく。

月並なようで、さに非ずの感がした。

災害のがれて笑う事があり

(涼 人)

この間の、十勝沖地震はまだ記憶も生々し

く、未だに痛ましい感じがするが、その後のあの災害をうけた人達の明け暮れは、どうであらうかと、心が疼く。この句のように、しばらくは笑いを忘れた人であつたらう。

げに、変災は予期せざる時におきるものだ。という感じを全国の人々がかみしめた。そうした中から、いくつもの実感句がよせられたが、災害事変は、大きければ大きいほど重圧がのしかかって、人をしてうなずかせる句にはならぬものだ。漸く、時過ぎ事去って、始めにしみじみした句を得る。

今さら、変災を想うことしきりである。

あれが父あれが母らしおとせ

(どんたく)

あしか、とおとせいの区別はなかなかつかぬ。水へもぐっている時はいつしよだが、岡へ上がると、その区別も、親子であることもはつきりする。しかもこの句は、語韻の上からも、おとせいであつて面白い。

実態も、おとせいは人間に似た動作をし、色も黒かつ色で、被毛もやわらかだ。

「あれが父、あれが母らし」とは、云い得て妙である。ペンギン鳥のような夥しい数の中でも、吾が子を間違える事はないそうだ。

動物園で改めて観察したくなる句である。

針の山歩くであらう嘘を積む

(酔 夢)

作者はいま、水商売をしておられる。いちいち本心ばかり云うのでは、商売は成り立たないであらう。が然し、作者は内心潔よしと

しない。じゃによつて、「針の山あるくであらう」すなわち、えん魔様に舌をぬかれるか、三途の川で針の山を歩かせられるのがおちであらうと想像した、面白い句である。

面白がつているのは、こちらだが。作者は真剣だろう。得てして作り事を云っていたのでは句にはならない。この辺が作句のいのちだ。

断層は生きのびるほど深まりて

(千 容)

作者は八十歳以上の高齢者である。それを知らずしては、この句は味わえない。

断層というものは、地表からはまったく窺い知ることが出来ない、地層の変動だ。もし、五十尺、百尺という様な、断層にぶち当れば、その鉱山は致命的なショックをうける。

吾々は、今の一変した、キカイ化したアメリカ文明をば、一種の大きな断層と見てゐる。それほど、吾が国土で日本独特の良さを味わい得たのだったが。このザマはなんだと、内心思つてゐる。断層の深さを染々味あわざるを得ない。これは作者だけの感じではない筈。

燃え尽す迄は自然にまかしとき

(い わ を)

句を見ることはむづかしい。この句を、家が燃えてると見てはこまる。作者は何を考えているのだらう。

マッチの空ら箱の様なものをもやして見る。空ら箱は、やがて灰となるが、あとには燃えカスが残る、はかなく在りし姿をとどめ

るかのようだ。そこには一くれの骨片と化した、在りし日の人間の形を思い浮べるのだ。こんな感じで、この句を味わったが。これは誰れもフト感じる。作者は、死というものを、じっと見つめているのではなからうか。若い人や、健康な人には無いことだが。

市バス所感

釣糞う料金箱のあじけなさ

(醉 升)

作者は交通局関係の人。大阪の市電・市バスは、いつからか料金箱に金を入れることになった。ツリがあるときは、下のうけ皿ヘジャラジャラとでるが、受ける方も無表情。車掌も無表情だ。旅行者は、ヘンなことを始めたと思うだろうが、これは乗客の利便を考えたものではなく、どうぼう絶めつ機だ。人間不信を象徴するキカイで、全く味気ない。役人の頭は、いつも後手、後手に廻転し

近 詠

今治市 月 原 宵 明

割箸が欲しいと思うスパゲテ
女史とてもバーゲンで撰る女の目
精薄のその純潔を祈るのみ

名古屋 長谷川 鮮 山

用心をして誘導にまたかり
老いの足に重労働な孫の守

ているが、近頃は車掌が手を出して受取ってくれる。それだけでも血が通った気がする。

大広間浴衣の首が違うだけ

(葵 水)

最近の観光客はおびたらしい数だ。旅館の大広間は、一浴した客がズラリと並んで、運ばれてきたお膳につくが、どれもそろいの旅館のゆかたを着てくつろいでいる。中には、社長もおろろし、女事務員もおろろが、旅館の側から見れば、首がちがうだけだという観察だ。商売というものはこうしたものだろう。なんでもない中に、ユーモアがあり、ペーソスがある。皮肉な句でしかも面白い。

末寺衆のかすりで門主緋の法衣

(句楽坊)

緋の法衣(ころも)を着ている、門主さん
も、末寺衆のけちな懐から奉納した、云わばかすりで納まっているのだという、末寺住職の見方である。門主と云えば、いち山のたばねをする頭職だが、これが親らんや日蓮の如く、生死をきわめた人物でもなく、ただの人だ。という慨嘆もひそんで居そう。門主は、いずれ末寺衆の選挙で選ばれるものだろうが、智徳兼備の人は少いよう。だ。

もみじバックに藤のよろめき

(葉 子)

深山幽谷は、いま青葉に包まれているが、その中に全く周囲の色と違う藤の花が咲いている。そのさまは、藤の花のよろめきに似た

感じをうけるという句意だが出色である。藤の花は姿といい、いろ風情、えもいわれぬものがあり、こうした観察は成立つ。しかも十四字仕立てで、古淡な趣きさえる。

しかし、少し俳人好み過ぎ、作者のためには、もう一歩つっこんだ句がほしい。但しこの句は、これ以外に作りようがない。

母の背中に幸せな子が眠り

(欣 二)

この句は、幸福に育った子が、母の背中に眠っているというのではなく、母の背中に眠っている幸せな子よ。という句である。

明治の頃、狩野芳崖の作に「悲母観音」という名画があるが、空中に画かれた観音像には赤児がまつわり、観音の姿は芳崖の懐の母であるそう。母の背中に眠る子が幸せであるのは当然。作意もそれであろう。

無心に眠る子が、神の姿であるとかわかる頃には、句意も明瞭となるものと思われる。

行楽へ花の命は考えず

(多 幸)

かんたんな句であるが、考えに沈ませる句である。花咲き鳥うとう春の季節は、何とはなしに人は浮かれ出すが、やがてそれが散り、あとがどうなるかまでは考えない。

句意はその通りであるが、いのちというものは、いろいろな形に変化するもので、枯れてしほんでしまっても、また咲くものであり、長い目で見る必要もあろう。しかし行楽客の在り方は、この句の通りだ。いい句だ。

豊臣秀吉

（七）

富士野鞍馬

石川五右衛門

その後、秀吉・秀次の仲が不和となり、秀次は、大賊石川五右衛門に命じて、秀吉を殺させようとした。五右衛門は、桃山城に忍び込んだが、千鳥の香炉が声を出したので果し得ず、二度目には、宿直の仙石権兵衛につまづいて捕えられた。という伝説がある。

その川柳は次のように多く詠まれている。

白波に千鳥は高く音を発し (四四二)

御寝所へよる白波になく千鳥 (八五二)

千鳥の香箱手をやと音を発し (一一三六)

実に名器誰白波に啼く千鳥 (一一三二)

白波にたたふ千鳥声をあげ (四二二〇)

白波におとろき千鳥音を発し (五二二〇)

白波が来たとき千鳥は音を発し (五六六)

呼子鳥千鳥が鳴いて目をさまし (四二一九)

——呼子鳥は猿で秀吉——

羽おり着た千鳥権兵衛とかまへる (四二一八)

権兵衛が目をささめとめしたとき (八九二二)

五右衛門びっくり権兵衛が足をま (五九二四)

権兵衛が足を踏んだが運のつき (三三二六)

そして五右衛門は、ついに三条河原で、釜煎の刑に処せられたといわれて、それを詠んだ川柳もまた多い。これは浄瑠璃・芝居にも作られている。

五右衛門も夜は山門からひよぐり (九六二一)

——南禅寺の三門に居たと作られている——

六右衛門の中で五右衛門行なはれ (三六一一)

——六右衛門は釜煎——

五右衛門は金のかかったころし (七〇二五)

五右衛門は丸ごちにたていへんを (安二礼)

五右衛門はなまにへの時一首よみ (二六)

——石川や浜の真砂はつきるとも、世に盗人の種はつきまじ——

種は尽きせじとは負け惜しみの歌 (観九)

朝鮮征伐

朝鮮迄も猿猴は手ののびし (四五八)

秀吉は、大陸征服の大事を以て、明国と友好を求めたが、応じなかったたので、道を朝鮮にかりて、これを伐たうとしたが、その朝鮮も明国を恐れて従わなかったたので、まず朝鮮へ出兵した。

三韓の犬も猿には尾をはさみ (三八七)

関白を秀次に譲り太閤となつて、天正二十年（一五九二）二月、自ら肥前名護屋まで出向き、十三万の兵を朝鮮へ出征せしめた。朝鮮は平定したが、明国軍が来て、ついに小西行長は、和を容れて文禄二年（一五九三）全軍凱旋した。

大明ンの後詰に小西ヒを投げ (五四四三)

ところが、和議文書に齟齬があり、慶長二年（一五九七）再び朝鮮に軍を進めたが、翌三年六月、秀吉が死んだので諸軍を引揚げたのである。

牡丹台落花みじんに小西勢 (二四八四)

明将李如松は大軍を率いて来り、平壤を陥れ、行長は敗走した。

朝鮮軍を詠んだ川柳は、加藤清正が独占的

で、

猿の下知虎を千里の外へやり (八六二)

三韓を犬と見て猿虎をやり (八〇一三)

蛇の目だぞ鮮になるなと下官共 (五二二二)

唐人はみんな嫌ひな蛇の目ずし (五三三六)

八道を一ト呑にする蛇の目なり (三三三九)

——鶴林八道——

日本の蛇の目唐までならみつ (五〇一九)

朝鮮も蛇の目傘でつた蛇の目也 (二〇九六)

異国まで灰汁で洗つた蛇の目也 (五二二〇)

唐人は平の竹輪をくひのこし (三三三六)

竹の子の輪切りを紋に虎之助 (一五七二)

等と、清正の家紋「蛇の目」をよみ、虎之助を「虎」としている。それでまた、

日本の虎は異国で鬼とよび (三八二)

猿と虎渡らぬ先と唐でいひ (八八三)

唐までも響く日本の虎の声

(一三四二)

我朝の武將の虎の威も高し

(一一六二)

義につく勇にはあらし虎之助

(一〇五五)

清正はりうさ川迄追ふ気なり

(拾五)

と、その勇をよまれ「鬼上官」と呼ばれてい

た。流砂川は印度である。

唐人を髣髴目で二度退治

(五八七)

と、日蓮信者で、馬標に「南無妙法蓮華

經」の旗をさしていたことも詠まれている。

そしてまた、虎を退治したと伝説され、

猛獸を切て威の付寅之助

(八五二)

和漢対肥後の武將も虎を打ち

(一三四二)

という句もある。朝鮮人参を想像して、

清正は人参畑ふみあらし

(拾五九)

清正は人参などに目をかけず

(五四二)

と作り、蔚山で籠城苦戦したので、

蔚山の籠城蛇の目ひからかし

(六六三)

とも詠まれている。

朝鮮軍は、敵の首級を待つて帰るわけには

ゆかないので、みな耳をそいで塩漬にしても

って帰った。それも川柳に詠まれている。

耳俵蛇の目印の送り状

(六四四)

耳をとるころは軍も鼻につき

(五五五)

耳を取って鼻の高い日本なり

(天元義一)

朝鮮でほつてもとれぬ耳の垢

(五五五)

日本へみやげ木くらげ二三俵

(三三三)

日本の手柄は耳が痛いなり

(寛初五)

目に余る大軍耳を皆そがれ

(一〇二九)

釜山浦の幽霊みんな耳がなし

(八五三)

三韓の幽霊耳なし山へ出る

(四九二)

その耳は、京都大仏前に「耳塚」となつて

いるので、

日本のぐわいぶんに成る塚一つ

(一〇三九)

耳塚は土産蛇の目は置きみやげ

(九〇九)

みみのあなすきくわではるすさまし

(天五智二)

大仏は耳の供養に建てたやう

(寛二二)

耳を伊達に築いた大仏の前

(寛二四)

三韓の耳へ日本の草がはへ

(四七三)

耳塚武徳筆塚は御神徳

(八六五)

耳塚は和漢へびく手柄也

(五八八)

等と詠まれている。なお小西行長を詠んだ句

がすこし見える。

耳斗りとは津の守の工みなり

(明八三)

一行長は摂津守

日本勢人参殿でつかみ合ひ

(六二)

人参を行長殿に見てもらひ

(拾五九)

日本勢一人は伽羅の目利もし

(初二)

朝鮮の大王さがす木薬屋

(拾六一)

大概な手疵小西が療治をし

(明三梅三)

清正の武勇小西の九そうばい

(一一九五)

三韓の裏店にても小西知り

(天六和一)

一代は白むくを着た木くすりや

(安八義五)

白むくは大名の着物

行長は、堺の生薬屋の息子だといわれてい

たので、いずれも薬にかけて戯作されてい

る。また、

取逃げの事は唐へは秘し隠し

(明七信一)

凱陣に唐の女をうたといふ

(明四桜六)

朝鮮垣はひやうたんでらりに成り

(三三三)

という川柳もある。

たけはら川柳会

一同

会長 山内 静水
顧問 上原 松緑
会計 脇本 政己

初歩教室

題 「花 火」

菊沢小松園

いつも思うことであるが、川柳のような短詩形に於ては一字一語も冗漫は許されない、無駄な語句は削り贅肉去るべしである。重複など以ての他と言いたい。削り取り搾り上げてピントの合った真骨頂へ努力を続けるように願いたい。この外に作句精進の要諦は有り得ないと私なりに堅く思っている。

花火鳴る内職の手は休まれず 秋 女

打揚げを見るは見合の顔でなし 弘 生

音がして気附けば花火もうしまい 弘 美

花火する近所の子供呼んでくる 利 美

恋語る二人へ花火忘れられ 誓 二

①華やかな花火に内職を配した対照が効果的だ、子供はせがむがその母親にはそれどころでは無い遅ましい生活力が句に漲っている。
②人間の顔は下目は陰になり上を見ると思ける、花火を見上げる顔も決して見よいものでは無かったのだろう、面白いが句想は浅い。
③無精者か忙しい人か、もう終いと言うのだから引続き上って居たのに気附いて見ようと

思ったらもうしまいで時間の推移も窺える。
④子供の世界に境界はない、線香花火を通しての平和な集いが微笑しい。⑤花火をだしにして会った二人には花火など問題でない、人目の闇こそ望ましいのだ。

子と遊ぶ花火へ昔の顔になり 秋 月

宵闇を待てぬ花火を子がせがみ 吐 来

盆栽を移して花火の場を作り 葵 水

大花火果てて港に詩が降りる 千 代

物干が恋の舞台となる花火 初 甫

①純真な少年の頃の心になって子供と花火を弄んでよきパパ振り、昔の顔がこの句を意義づけた。②花火を買って来た子供は夜を待てぬのである、夜の暗さが花火を引き立てる利智は子供には通ぜぬ、子供の世界は別である。③花火の為に盆栽を避難させて場所を作る、よくある情景だが子供に大人の領域が犯されるのが面白い。④華やかな裏の淋しさ動のあとで静である賑やかな宵の賑々しさに引きかえすべてが終ったあとの静寂、そこに本当のまた元の人生が息吹く、心の安らぎを覚える句。⑤恋を覚えた年頃は機会を捕えることに敏感だ、現実の眼はよく四辺のものを利用する。花火・物干利用価値は充分である。

此の頃は線香花火でこまかせず 鉄 舟

だしぬけの花火に盲も顔を上げ す き

打上花火うち中の灯をみんな消し 英 詩

絢爛と仕掛花火はいま消える 肖 二

二階から見える花火に手がつれ 静 観

①上五で成長した子供がよく出ている、軽く

詠んでは居るが纏め方上々。序ながら関東の人は線香花火と言ひ関西では花火線香と言うように思うがなぜだろう。②突然のことに盲人も驚いたのだろう、実際にあってもこれだけでは作為が現わやや興醒めでないことでもない。③これは無難同じ光りの中の明暗だから抵抗を感じずに受取れる。④下五の結びで生きた句、いまが殊によい現実感が蘇って生々とした佳句になった。⑤手がつれば花火を指さした同士の手が触れた程度のことか。

み

んなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチック



積 水 化 学

本社 大阪市北区宇野町1

花火会待つ間に背がいびきかき
だしぬけの花火に犬も跳び上り
大花火菊一輪の華やかさ

綾子
とみ子
政夫

怖々と幼児花火を持たされる
誘われた花火結局飲み歩き

正朗

①親の気持ちも知らぬ背の子供花火の上らぬ
先きに寝てしまった、温かい親ごころも無邪
気な子供には通ぜぬ、花火と寝てしまった子
供の対照がよい。②突然の花火に盲人も飛上
って驚いたという、見附どころは面白いが底
の浅い句に終わった。③語呂が美しい空一杯に
拡がった花火の情景もあます処なく再現して
る。④よく大人がやる事だが子供には迷惑な
こと、こうした情景も都会ではもう見ること
も少なくなった。⑤花火は口実で目的は外に
ありで男の奔放さを咎めた句、結局の句語が
光る。

車椅子花火の方へ向きを変え

芳子
狂興

よき母でありたく線香買う
花火師もうつぶん晴らすか早打ちし
採めている二人へ花火派手に鳴り
思い出を繰り寄せてる遠花火

美代
同

近 詠

今治市 長野 文庫

蛙の子は蛙で親にせいがないし
大低は退社ベルから元気が出
人工の葉で味がないさくら餅
鉄骨で建てて嵌め込む床柱

花火線香孫は昼からやれと云い

鶴声

①不自由な体を車椅子に支えられて花火の方
へ向きを変える、花火と言う華やかな題から
此処まで飛躍させた慧眼を買う、佳句。②詠
み出しがよい、もしこれが生母でなかったら
場面は一段と深刻なものになる。③花火師も
人間時にもややもやしている日もある、早打
ちの花火から連想して花火師の心理過程へま
で入れ込んだこの作者も苦勞性である。④若
い二人のうちに無い痴話喧嘩であろう花火
の音に掻き消されてやがては笑い声、若いと
いうことは楽しいことである。⑤花火を遠く
に聞いてあんなこともあった斯うしたこと
もあったと、花火を通して手繰り寄せられた感
傷がよく纏まって居る。⑥幼児に昼夜の観念
はない昼からせがまれて花火を説く老の笑顔
もほほ笑ましいが句意は浅い。

物干の花火の出来る間に寄り

吐痴男

都会の涼味へ花火の華やかさ
無精者花火の音を聞いただけ
母と子の囲む花火は童話めき

軒太楼
比呂路
白汀

しめってる花火へマッチばかり要り

徹也

①都会の不自由さは花火するにもその暗い
所を探さなければならぬそれ程灯りの届かぬ
所が少ない、恵まれて居て恵まない都会の
子の一面を突いて居る。②涼を求めて屋上へ
花火は派手に夜空を彩っている夏の風物詩で
ある。③笑いを誘う句の少ない近頃これは
面白い句に出会って思わず快哉を覚えた、花
火を知って居て尚且音を聞いて居るだけで見
ようともせないひねくれた一徹な無精さに痛

快、佳句。④若い母と子夏の夜を無心に花火
に興じる静かなただずまいは一幅の画であ
る。下五の句語に如何にもお伽噺が出来る。
⑤花火が湿っていたのは此の句だけだった、
意表を突いたのは印象的だが句の内容は平凡
で惜しまれる。

握る手がだんだんきつうなる花火 選者吟

遠花火過去と未来の中に鳴り 同

八月二十日締切 十月号発表

題「流れ星」

宛先 大阪市阿倍野区王子町四丁目二の
二十二 菊沢小松園

★

高崎雄声氏(同人)は六月十九日午後六
時三十分、胃ガンのため逝去(明治三十六年
生まれ)六月二十日の告別式には八木摩太郎
氏が参列された。なお清水白柳氏はその翌日
高崎家吊問、遺族の方をねぎらわれた。

黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-114
夜間 06 4400-8

夕涼み

大江秋月選

夕涼み浴衣に素足がよく似合ひ
ゆれてゐるすだれありけり夕涼み
夕涼み浴衣の似合うひとが佇つ
ほたるの追う妻童心の夕涼み
夕涼み昼の暑さを捨てて出る
遠花火此処から見える夕涼み
欄干に二人ずつゐる夕涼み
夕涼み湯上りの妻見違える
湯上りのうちわ母娘の夕涼み
出迎えに夕涼みかね妻の来る
加茂川の床に丈けある夕涼み
行水をすませ夫と夕涼み
遠雷へうらめしそうな夕涼み
夕涼み浴衣の似合う娘に育ち
夕涼み職務質問されて去に
縫いたての浴衣に着替え夕涼み
伝説の星を拘って夕涼み
夕涼みかたがた遠い方の風呂
川風に浴衣の糊も心地よく
老いらくの恋も芽ばえて夕涼み
出稼ぎの父待ち遠し夕涼み
せめて窓開けて団地の夕涼み

利美 鎮久 勝志 佳女 李朋 曉明 章代 珂也女 政夫 肖二 綾女 梁水 正朗 藤原秋月 勝白 百汀 狂留子 頂留子 藤波 奇童

浴衣着た巡査に出合う夕涼み
ナイターの帰趨決まって涼みに出
お色気のある娘がもてる夕涼み
伝説の続きを聞いた夕涼み
クーラーの不弁は夏の宵を閉め
夕涼み基地反対の署名が来
夕涼みやつぱり日本の娘に浴衣
夕涼み母のすわる座一つあけ
孫婦省早寝の祖父も夕涼み

秋女 素身郎 鶴丸 仙芳 章雅 柳子 十九平

安静が薬みんなで気をつかい
百薬の長すんかり身を壊し
薬にも毒にもならず世を終り
保険医は高貴薬だと金を取り
長患い処方方がよめて不倖
本人は癌とは知らぬ薬包紙
投票が変れば変わるで心配し
如才ない医者は漢方薬も賞め
青春も白衣の薬剤室で散り
カナ文字にして家伝薬たち直り
コマシヤル通りに薬効きはらず
つばめ来る頃に薬屋何時もくる
農薬の功罪ホタルの唄きけず
三ちゃん農薬へリコプター！撤く薬
効きすぎた下剤往復ばかりさせ
アザラシ児サリドマイト云々悲劇
クコ、アロエ、コンフリット、ヒマワリまでも植え

白汀 透風 藤波 政夫 初甫 里風 木魚 いさ夢 トク子 史朗 奇童 秋女 梁水 可住 芳子 李朋 みのる 宗太郎 忠志 古明 誓二 双葉 曉風 曉風 道雄 軒太楼 礎山 十九平

人

天体の神秘にふれる夕涼み
やつと児を寝かし寄り添う夕涼み
病舎から見れば街の灯涼しそう
夕涼みの団扇明日を考える
ジョッキ一ち星ありビルの夕涼み

宵明 芳子 史朗 初甫 どんたく

地

花ゆかた見せたくて出る夕涼み
お地藏を会釈で過ぎる夕涼み
満ち足りた二人に楽しい夕涼み

恵子 春日 弘朗

天

一坪の庭で団地の夕涼み

軸

薬

今西章雅選

仁丹の看板土蔵の裏で錆び
親切が教える薬へまどわされ
五人が五人買った薬の値が違い
欲求不満くすりそれから不養生
ビタミンを打つほど交渉もつて来
栄養をとって薬を牽制し
よくなると菓子で薬を飲まされる
血圧へ薬が効いて下がり過ぎ
薬なら何んでも知ってる蒲柳
あらたかな霊泉飲んだり浸ったり
お薬の時間を秘書に言い含め
長生きをしてネと薬強いられる
思慕おさええ闘病薬に頼り切り
うがい薬威勢よくしてパツと吐き

有名

大山雅城選

良薬の苦さゆがめた顔で効き 千翁
 佳 かつろぎの妙薬一合二三勺 惠二郎
 薬石の効なく後頭の涼しさよ どんたく
 投薬の呼吸病氣を握って 千翁
 一徹の薬ぎらいに病みつかれ 宵明
 冷えてゐるのがありますとは薬 庸佑
 膏薬の手でたこ焼を差し出され 春日
 麻酔薬さめて生きてた傷疼く 芳仙
 地 扇風機あつちを向かす粉薬 曉明
 天 大病院袋へポイと予製薬

有名な言葉宇宙に生きつづけ 柳子
 有名になつて茶漬を恋しがり 政夫
 嫁ヶ島有名なれど小さすぎ 勝久
 宗哲と云われる束の艶をほめ 初甫
 有名なわられる粗末な店構 肖二
 有名な老舗に嫁の来てがない 十九平
 小説で知られ自殺で名がながり 宗太郎
 有名な寺とは知らずつばめの巢 秋月

売り出して卒業はもうあきらめる
 有名な汚職となつたトップ記事
 往年のスター場末で酒を酌ぎ
 有名な天守へカメラバックさせ
 死してなお有名歌人家を 李和久
 有名の重さ二代目持ちきれず 富子
 名人ともいわれ変人とも云われ 旭峰
 有名な人のお家を見てまわり 秋女
 有名になれば親戚ふえてくる 宵明
 ベストセラーになると益々読ま 綾女
 有名な自殺の名所のぞいて来 鶴佑
 有名な古墳訪ねば苔の穴 庸声
 週刊紙有名作家の要はなし 佳朗
 有名な順に世話人名をつらね 史朗
 有名な事件略称だけで足り 涼人
 有名にならずも幸を子に願ひ 隆子
 有名になつて親子がよう逢えず 芳仙
 有名も悟れば星雲中の星 章雅
 有名は大南洲の意を奉じ 和宏
 有名になつて夫婦にヒビが入り 素身郎
 有名な父が重荷の子に育ち 代仕男
 有名になりすぎ僕のママでない トク子
 有名歌手へ少し狂っているファン 魚山
 正体も知らず有名やさかいにな ア古方
 無名でも実力有名人の上 公輔
 有名な講師の話耳を抜け 芳子
 有名税としてゴシップに目つむり 七面山
 なるほどなア有名なはず秋田路 惠山
 有名になれば奇行もまた逸話 白汀
 有名なあまりにも有名な黒眼鏡 百水
 プライバシーはじくられも有名税 惠二朗

六カ月速成

教授日 毎水曜日、月四回
 自午後七時 至午後九時
 教授料 一カ月二〇〇円

関西奇術教室

大阪市南区大宝寺仲之町一丁目
 誓得寺内
 TEL 〇七二一八
 校長 村田 瓢太

有りがちなことも大きな記事に 百酒
 有名人が生れクラス会復活 可住
 有名になつた旧友やり過し 珂也女
 佳 有名入序文推挙の辞でかざり 代仕男
 有名な石一つ見に廻り道 奇童
 有名になつて家庭を遠ざかり 軒太楼
 有名な店も時代の旗が立ち 木魚
 会つてみれば有名入小男 弘生
 人 有名なデザイナー十年前を着せ 礎山
 地 わが町にくる頃の歌手落目に 史朗
 天 有名になつて声まで替つてき 透風
 軸 フジヤマとゲイシャガールを觀にこる

第二百五回（復活第十回）

大 萬 川 柳

「他人」

入選発表

選者 清水白柳
 投句総数 七百三十二句
 入選 七十四句

大阪 水客
 満員で他人の鼻を見ていたり
 大阪 形水

慰謝料を取って他人になつてやり
 高石 好郎

他人顔したのが女気に入らず
 大阪 楽々

滑稽に見える他人の子煩悩
 倉敷 三林坊

他人ではないが力にもならず
 大阪 双葉

他人さえ泣いてくれたに寄りつ
 岸和田 きさ子

考えてやはり他人に借ると決め
 堺 一舟

他人から見れば別れりやええ夫婦
 大阪 あいき

他人でいる間に何かと買わせる気
 大阪 弓彦

他人から見れば子供の喧嘩なり
 尼崎 秋水

真相を知らぬ他人のおせっかい

守口 笑風
 焼香のひとは他人でないムード
 大洲 曉明

他人から見るとよいお子よいお家
 倉敷 柳子

他人には姑わたしをほめてくれ
 大阪 比呂路

印だけで他人になつたつもりなり
 笠岡 忠三

里帰り他人行儀の姉となり
 大阪 千歩

他人さんから見れば分りのよい姑
 堺 草春

もう他人になつたひとに似て育ち
 岡山 照路

目くばせて他人になつてすれ違い
 東大阪 山椒坊

里帰り挨拶だけは他人めき
 大阪 弘生

もたれてる女他人の顔でなし
 和歌山 とみ子

土壇場になつて他人にまた戻り

英詩
 無い袖を他人そうとは見てくれず
 大阪 鬼遊

妹のどこが良いのか他人さま
 鳥取 日満

金額は他人の知恵のポチ袋
 西宮 百酒

仕送りが絶えりや他人になると決
 富田 東雲楼

戸籍では他人のままで共白髪
 羽曳野 一治

ミニ姿他人の娘でほめておき
 和歌山 公作

夫婦喧嘩してまで他人の世話やき
 羽曳野 一峯

他人様手当り次第にほめて去に
 倉敷 千翁

他人なら他人でいいとゆすられる
 羽曳野 吐来

礼装の妻は他人の顔になり
 米子 瑞枝

借用書他人行儀に母へ書き
 岡山 藤波

内弁慶と嫌われ他人には好かれ
 笠岡 要次

悔しさのあまり他人につい洩らし
 米子 千代

アクセントどうも他人できひびき
 岡山 久米雄

まだ他人男と女とまた出合い

すばらしい
 着心地



蝶久
 シーツ

倉敷 旭峯

浪人がのん気なうつる他人の目
 大阪 章雅

他人ではないのと母をおどろかし
 岸和田 葛城

事故現場他人がやがや見てるだけ
 京都 征山

社内では他人のような顔で事務
 米子 勝久

他人には見せる笑顔を妻見せず
 鳥取 佳女

別れるとあっさり云えるも他人
 宝塚 ゆきを

終戦を境に他人の土地となり
 昔なら他人の地所も踏まず行け

大阪 静波

夫婦にもなれず他人で通されず

金の相談親も他人もそっぽむき

大阪 頂留子

割切て舞台を沸かす元夫婦

ぶちこわしといてなぐさめる他人

高槻 静馬

手不足を云うてて他人にやらせない

ベッドまで見てきたように他人

笠岡 白梅子

保険金の行方を妬む他人の死

他人とは思えず母に似た老婆

島根 芳子

他人には親切してらうちの嫁

小松 宗太郎

仲人は他人平気で嘘が云え

子が継がぬ職を他人の子に教え

倉敷 素身郎

もともとは他人喧嘩もする夫婦

ほんとうのことを他人は云うてくれ

尼崎 利美

他人ならそれで済みます済ませます

他人から見れば話のわかる父

尼崎 慶彦

金策の他人行儀を叱られる

他人から云わせば父に過ぎた母

大阪 柳志

おくやみがすらすらと他人なり

かどの立つ事は他人の舌を借り

車庫も建て他人も入れたのにつ

佳句

大阪 文秋

他人には云えぬ話で夫婦もめ

コンパクト開きそこから他人です

他人には夫の夜遊び自慢なり

おせっかい他人の恋をはがゆがり

仲裁に這入って他人邪魔にされ

他人ならこうも云わぬと又叱り

戸籍では他人と知った母を恋い

せめてもの願ひ他人の血にすがり

許してもよさそうだがという他人

大萬ベストテン (七月現在)

一 素身郎 二〇・〇 倉敷

二 文秋 一九・〇 大阪

三 柳志 一七・五 大阪

四 弓彦 一五・〇 大阪

五 好郎 一四・〇 高石

六 吸江 一三・五 藤井寺

七 ゆきを 一三・〇 宝塚

八 水客

九 美彦

十 慶彦

十一 日満

十二 静馬

十三 千代

十四 清人

十五 静波

十六 十九平

十七 きさ子

十八 阿茶

十九 要次

二〇 瑞枝

二一 草春

二二 鉄児

二三 形水

二四 水

一二・五 大阪

一一・五 大阪

一〇・五 鳥崎

一〇・五 高槻

一〇・五 米

一〇・五 大阪

一〇・五 大阪

一〇・五 大阪

一〇・五 岡山

一〇・五 岸和田

九・五 大阪

九・五 笠岡

九・〇 米

九・〇 倉敷

八・五 堺

八・五 門真

八・五 大阪

以下略

第十三回「抗議」五句以内

締切 九月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五ノ六

川村 好郎

郵便番号 五九二

▼都合に依り本年度は第十五回まで

で継続して最終ベストテンを決定

することになりましたから、ラス

トヘビーをかけましたように、大

会は来年二月下旬に開催致します

(好郎)

所題時 玉造川柳会

八月十日(土)午後六時

いよいよ・力む・古傷

玉造交差点南一〇〇米

大阪信用金庫

所題時 南大阪川柳会

八月二十日(火)午後六時

一年・涙・協力プライド

トロバス線国分町

東三〇〇米 乗願寺

優雅な書き味



マチカワペン

中島生々庵著 川柳講座 50円封入・一冊進呈

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生霞乃女史(奈良県)から生々庵主幹宛に七月七日は歯が痛みどうにも動けなかったの、皆様に迷惑をかけましたと。

▼路郎先生三周忌句会に、番傘、ふあうすと、時の川柳各社の大物が、わざわざかけつけてくださった。

▼せんば川柳社二十周年岡橋宣介古稀祝賀記念大会は、尼崎市労働福祉会館で、くわな川柳会創立川柳大会は桑名市民会館で、諫早水害殉難者慰霊、天満神社揚額川柳大会は、それぞれ七月七日開催された。

▼白石朝太郎氏(福島市)から「私は路郎君が好きだった。だからその門下の君に柳都の大会で逢うのが楽しみだった。会えて喜んで折々の消息を聞かして欲しい」と薫風へお便りを頂戴した。選者室で長時間ご高説を拝聴することが

出来、翌朝宿舎での別れにタクシイの後部を叩いて惜別の情を示して下さったご厚情は忘れられぬものになった。

▼堀口塊人氏(西宮市)から七月七日の路郎忌には「せんば」の先約があり欠席お許し下され度く、皆様によろしくお伝えをお願い申し上げます。

▼三条東洋樹氏(神戸市)から「竹原の山内静水君から路郎忌には行くとの通知人が来ています。路郎系の柳人が沢山集って来ますように今日の盛会を祈ります」

▼榎本聰夢、川村好郎両講師の堺市成人学校川柳講座は回を重ねるごとに盛況で好評を博している。

▼ふあうすと川柳社の明治百年記念第十三回全国川柳作家合同句集は参加数総計八百九十四名、札幌川柳社の第一回全国川柳作家誌上

合同句集は百五十四名の参加者であった。

▼第十二回愛媛夏の川柳大会は八月十一日(日)午前十時から大洲市大洲西山根龍護山で開催。兼題、即答

点・忘れる・捨石・蚊・弱各題三句、投句は四纏十八纏の句箋に明記、百円封入の上、八月五日までに大洲市常磐町米沢曙明宛。

▼第十七回山口県川柳大会(川柳やまぐち百号突破記念)は、九月十五日(日)午前十時から山口県自治会館大ホールで開催。第二部兼題、女好き・持ち前・ふるさと・再会・面接・進む

・祭、席題当日三面発表、投句は各題別紙、二句連記の上百円封入、九月五日までに山口市西京橋毎日新聞山口販売所内第十七回山口県川柳大会事務局宛。

▼第四回夏の雀郎まつりは八月二十五日(日)午前十時から栃木会館で開催。

▼平安川柳社恒例の夏をたのしむ会は八月十七日(土)午後八時から伏見区桃山善光寺で開催。兼題、あこがれ・蓋・愚夫愚妻、会費三百五十円。(夜食朝食費と)

▼伊知呂忌句会は六月十五日名張清風亭で。

▼備前川柳社六月例会は十三日横山一声居。

▼ひらない句会(青森県)は六月九日工藤安亭居で。

▼川柳たましま六月例会は六月九日川村好郎氏を迎えて戸島神社で開催。

▼中京川柳社史出版記念併斎藤旭映氏喜寿祝賀句会は七月二十一日正午から愛商銀ビル五階ホールで開催。

▼東京番傘川柳社の新発行所は東京都文京区目白台一ノ八ノ三・北原方へ。

▼昭和四十二年度(第十回)花童子賞入選作品が川柳は「鍵かけた時から金庫孤独なり」など五句に。第二席は東海宝船氏、第三席は羽立愛川氏。

▼松江梅里一年祭追悼句会

は六月二十日阿倍野区松崎町の制京大萬楼上で開催。

出席者に故人作いろは川柳のプリント、お供養などが出で、兼席題もすべて故人を偲ばせるものばかりで出席者一同その急逝を再び惜んだ。

▼吉田水車氏(名古屋市中区)は六月九日能登を観光

曾々木海岸から「来て見れば日本もひろし能登の旅」の句信を寄せられた。

▼大鉄川柳会吟行は五月十九日(日)京都椿寺から船岡公園、しようざん織を見学して光悦寺へ。杜的、水客、万的、宗悟、季笑、季賛の諸氏が出席された。

▼山田季賛氏(高槻市同人)は五月二十六日姫路書写山円教寺へ。六月九日には西国第二百六番札所の一乗寺へ参拝、北条町の五百羅漢へも参詣された。

はげぬ・かぶれぬ白髪染

容理え男

環状線寺田町裏駅南一丁

▼川端柳子さん（倉敷市同人）は六月初旬、音戸大橋へ行かれ、「軍港を今釣糸のほしいまま」と感慨を寄信された。

▼岩谷二三枝さん（広島県）から、「諸先生の秀逸なる玉句・柳論を拝見味読し、よい勉強をさせて戴いております。梅雨の季節編集の皆様ご自愛を御祈り申し上げます。『野の花の嬌りも知らず咲き匂う』」

▼河相すゝむ氏（西宮市同人）は胃潰瘍手術後、自宅で療養を続けておられるが一日も早く嘗ての東奔西走ぶり、句会への出席ぶりを再現して戴きたい。

▼林夢虹氏（豊中市同人）は六月二十三日姫路へ出張

時実新子さんを訪問歓談された。

▼菱田満秋氏（横浜市同人）は六月二十四日東尋坊から片山津温泉へ。「温泉であの悪友のなつかしさ」

▼寺尾俊平氏（西大寺市）と橋高薫氏は六月九日柳都川柳社二十周年大会に出席。七、八日は能登半島を一周、十、十一日は佐渡を観光、藤巻昌子・下村梵・高野不二・坂本三省氏らと初対面、村上球絵さんとは十年ぶりの再会で感慨深かった。「のろま木偶まはたきをして人嗤う 俊平」

▼第四回大陸柳人同窓会は九月二十二日（日）、二十三日（祭）奈良いかるが荘で開催される。連絡は姫路市北条鉄宿四〇大井正夫宛

▼福田丁路氏（高槻市同人）は六月二十九日から七月一日にかけて善光寺、戸隠神社、野尻湖、赤倉温泉へと

中島紫痴郎氏（長野県）逝去

昨秋来療養中であつたが、六月三十日午前九時十一分脳出血で永眠された。享年八十七歳のご高齢だったが、さきごろ夫人に先き立たれたばかりであつた。謹悼

うまさの敵「シブ」を追放

〈生きた味〉
アサヒビール



年今年と参列できてありがたかつた。明朗氏とともに帰りました。大阪も二度目まだまだ迷う道一祥月。▼若本多久志氏（本社副理長）は七月の新年度から尼崎ライオンズクラブの会長に就任。

▼西出一栄さん（大阪市同人）は六月二十八日全快退院された。

▼永尾永断氏（篠山同人）は英断と改号。

▼若本あき坊氏（ハワイ同人）はハワイ移民百年祭に常陸宮両殿下を迎え、日本領事館で叙勲伝達式があり勲七等旭日青色桐葉章を受けられた。ただ嗚呼と勲章受ける手がふるえーあき坊。

▼清水白柳氏（大阪府理事）は七月十八日富田林市ロータリークラブで川柳を講演。▼八木摩太郎氏（堺市参事）は七月三十一日の堺夜市川柳句会で「堺魚夜市の歴史について」を講演。また七月二十一日の富田林美人コンクールの審査員として出席された。

▼石原青竜刀氏（東京都）は昨夏輪禍で令閨をなくされたが、天満千代女さんや香蘭の原田みよさんらの肝入りでパパと呼ばれることになった由、宇和川木耳氏から吉報。なお青竜刀氏は「三夫氏の自選百句」天皇のレージャーはカニとたわむれるに諷詩同志の感を深くされた。

▼野田素身郎氏は七月十七日來社、白柳氏らと歓談。

疲れ 肩こり 食欲不振 つかれ目 神経痛に

▲タケタ薬品

アリナミン

路郎先生三周忌

本社句会

一会場 光明寺
一七月 七日・一時

参議員選挙とカチ合つたが、路郎先生を慕う柳人が広島から鬼焼、不朽、蘭幸、英詩、静水、島根から明朗、正朗、清泉、祥月諸氏。番傘川柳社から聡夢、太路、三碧、佳凡諸氏、ふあうすと川柳社から不二也、言也氏はか、時の川柳社から東洋樹氏、平安川柳社から入仙諸氏ほかご出席、また電文を紅寿氏、以兆氏ほか、それにお供えを各方面からたまり感謝の連続であつた。

アジサイが美しい庭園にかこまれ、プログラムは予定通りに進んだが、霞乃先生がご病気で欠席されたのはさびしかった。句会賞杯は旅風氏が獲得。晩餐会は七時におわつた。

出席―鬼焼・不朽・蘭幸・英詩・明朗・正朗・清泉・葛城・静水・春巳・雀踊子・柳宏子・一舟・栞・小松園・白柳・鬼遊・鶴声・県吉郎・花梢・肖二・綾子・摩天郎・いさむ・弓彦・一三夫・好郎・潮花・貞山・聡夢・水客・竹荘・文秋・痴亭・瓢太・多幸・清人・阿茶・生々庵・一点子・古方・弘生・柳志

・あいき・操子・幸代・千梢・喜風・彦彦・多志・与呂志・太路・つき子・宇宙太・美房・双楽・右近・野迷路・滋雀・静馬・春果・小石・吸江・六龍子・天笑・旅風・万的・狂二・笛生・トメ子・喜恵・入仙・杜的・恒明・静歩・季賛・祥月・鳥狂・宏子・庸佑・亜成・形水・金三・良子・東洋樹・言也・誓二・竹太郎・凡九郎・聡一・不二也・葉子・青木三碧・大田佳凡―敬称略―

席題「目」

伊藤入仙選

人目があるからと人目避けていず静歩
可愛い目あれで男の骨を抜き一三夫
口程に物を言わない愚鈍な目肖二
細い目が気になる程にまた太り
落選の目無しタルマよどこへ行く
青い目という宿命に耐えて生く
目の見えぬ人から花の名教えられ
他人の目は間違いないと言われ
目にいれて痛くない子に裏切られ
真直に見られて嘘の眼がゆらげ
溝蓋の位置も知つてる社長が目
混声のするどいタクトを目で取らえ
目立つようになつて噂は消えかかり
税務署へ来てあきらめの目をつむり
生酔いの触れなば落ちん目を選び
目もとがそっくりなどとほれてける
目に見えて退職金が減るあせり
目に見えはんの雲を追つて病み
目に青葉壁のよこれがよく目立ち
美しい目で目薬のコマーシャル

満員車みんな痴漢の目をしてる
飛び飛びに目がいくつある抽象画
目ぐすりをさすのにいらぬ口をあけ
電話をかける早さ課長の目にとまり
失敗をかくす目付きを疑われ
片目だけ入れたタルマが年を越し
プロローグ眼は客席を読んでる
説教をうわの空で聞いている目
美容体操に目の運動もつけ加え
目を附けられてゐるとは知らぬ金離れ
目に見えぬきずなの強さ分りかけ
目の位置をずらして妻のぐちを聞き
叱られた目が迷うてる黙否権
へそくりは目立つところへも少し置き
血走つた目が真実を訴える
眼鏡要る目で新聞も邪魔くさし
視力減退日向の方へまわる父
目かくしヘソツと甘える息づかい
目の底の笑いを孫に見抜かれる
髪染めて目の色までも変えたい気
目先きく男で信用もされずい
人生を泳ぎ疲れた目と思ふ
鬼瓦の目に沁むバスの排気ガス
顔中にこぼれ目薬味がなし
目札を交しロビーをすれ違い
ややこしい目付きをさせる視力表
目の中のゴミに夜通しいじめられ
目をむいて死んでる蟬へ蟻がより
目を閉じてすでに自分に負けている
たわむれの言葉信じた目に困り
肖像画先々代も奥目なり

孚彦 阿茶 痴亭 天笑 いさむ 正朗 恒明 弓彦 阿茶 小松園 鬼焼 滋雀 静馬 柳宏子 文秋 白柳 正朗 旅風 阿茶 水客 万の 聡夢 言也 聡夢 万の 蘭幸 英詩 入仙

榎 席題「泳ぐ」

本聡夢選

プールサイド水着を見せる足をつけ
泳ぐよりキヨロキヨロとサングラス
ガールハント泳ぎはそっこのけで
はち切れる水着女は泳がない
泳ぐより見せる水着に気をつかい
泳ぐのはどうでもよいという水着
泳がない妻も水着をさげてる
見るからに泳げそうでない水着
泳がない水着異性の目を意識
泳いだら汚れる水着着て歩き
遠泳の目標となり雲の峯
ひざまでの水を愉しく水泳着
泳ぐにはまだ早すぎる海の色
ほんの少し泳ぐ妻にもいる水着
子の泳ぐ方へ母親ついてゆき
対岸へもうくたくたで泳ぎ着き
競泳へ男に負けぬ水しぶき
泳がない子より泳げる子案じ
水の番孫の泳ぎに気がつかれ
目高さへ泳がぬ程に川濁り
熱帯魚エリートらしい泳ぎぶり
スイスイと思うことなく熱帯魚
泳がないから浮いていて助けられ
金魚もう泳ぎつかれた夜店の灯
島目指す遠泳の列たぐましく
スモッグを吸うて五月を泳ぐ鯉
泳ぐ子に泳げぬ親がついて来る
目ばなしの出来ぬのがいて泳がれず
寄付金を足したプールで子等泳ぐ
バイキンと泳いだきたと知った記事

入仙 恒明 滋雀 柳宏子 鬼幸 恒明 静秋 文秋 六竜子 鬼焼 万的 潮花 潮也 一三花 明朗 肖二 清人 生々庵 小石 花梢 天笑 泉吉郎 古方 天笑

背のどくことこで泳いでみせるパパ
泳ぎぬく記録へ青春すりへらし
珍重の金魚泳げる型でなし
陽が落ちてから来た水着よく泳ぎ
メガホンは泳ぎ達者を叱りつけ
水族館蛸蛸なりの泳ぎよう
海の底逆立ちをして海女稼ぐ
マドロスの泳ぐ自信を消すデッキ

席題「景色」

三条 東洋樹選

湯の町の景色と別に牌をもつ
尼寺を絵にして嵯峨の秋がよし
絶景へおまけがついた鐘の音
フィルムを入れ替えている旅三日
景色などどつちでもよい飲み仲間
はるばると浅間で霧を見て戻り
絶景を削ってここも建てる音
山頂へ一番乗りという景色
大手術今日の景色を期待せず
見晴しもいれて茶店の高いこと
雪のある景色若さの腕がなる
見晴しのきかぬ景色を雨のバス
眼底に残る景色を歌に詠み
あの海この山入れてホテル建ち
バス止めてガイドは耳に見る景色
そこに男と女景色どっしり構えたり
故郷の景色も捨てたものうち
カレンダーの景色と美女があしらわれ
都心遠く景色の中の老夫婦
波しぶき太平洋につづく海
絵ハガキで見るほど景色ほめられず
絶景の真下は恐いような海

蘭幸 一三天 弘生 栗柳 白柳 摩太郎 眉水 聡夢 杜的 一舟 笛生 吸江 静馬 一点子 蘭幸 良子 柳宏子 宏子 阿茶 千梢 一三夫 いさむ 凡九郎 文彦 秋彦 綾女 幸

十カ国見える天気へ来合わせる
絶景の私ひとりへ蝶がくる
冬の景色の一つに尼僧の急ぐ道
トンネルを出て故郷の浜になり
ポスターのように景色は替わらず
村にいて景色の中にわが家あり
雨の日の流を眺めてただひとり
弁当を食べる景色へ鹿も来る
観光地絵葉書程の景でなし
ふるさとと景色自分をとりもどし
青い目をびつくりさせる逆富士
交通が悪く景色も見捨てられ
いい景色いちいち妻をいれて撮る
素晴らしい景色資本家来てこわし
移民船もう見詰めの山みどり
ここからは風も交ってきいた景色
一人来て二人で来たいという景色
新婚の時結婚の時富士おなじ
ポスターはここから撮った朱の鳥居
似たような景色に飽いて家を恋う
窓からの景色さえぎるビルが建ち
釣人も景色となった雨の瀬
景色より飲んで寝てきた旅疲れ
絶景がすぐたところで目をさまし
見なれてか牛富士山へ尻をむけ
詩にならぬ世相舞子の松が枯れ

兼題「子」

菊沢小松園選

銀婚は子らのブランのまま動き
もつともと思う理屈へ子を叱り
スピードを出すな出すな子が弱り
買うてやったブラモ子手も邪魔に

形水 水客 万的 水客 柳志 一三天 眉水 春巳 宏子 正朗 双楽 静水 不枯 滋雀 竹梢 花莊 恒明 恒明 白柳 恒明 白柳 恒明 滋雀 阿茶 東洋樹

貰い子へ悲しきまでに氣をつかい
子が寝ても蟹が泡ふく洗面器
他所の子もすこし余計に褒めておき
子の寝顔親を信じた安らかさ
家内中よつてあまえる子に育つ
子のじん話がつづく市籠籠
希望なき生活へせて子の笑顔
仕送りの便りへ角材禁じとき
老いて子に従う決心やつとき
両親の欠点ばかり子がもらい
正直な子へ交番の目がやさし
足音をしのばせてまで子の寝顔
腕白でしたと新郎をすっぱめき
小遣いは呉れるしどの子も親思い
子のために生きて子供にうとまれる
子にすればカラーテレビも高くなし
子には子のいい分があり親ともめ
抱いた子におへその辺り蹴飛ばされ
幸福は子らの仕組んだ温泉につかり
鍵っ子を空地への小したそがれる
子の背たけ見上げて小言ひつこめる
昇給に合はしように子が産れ
見ていると子供の喧嘩面白し
母の目にもう落ちついた子の世帯
入社した当座は食費母へ出し
末ッ子にまだPTAが脱けられず
説き伏せて見ても所詮は吾が子なり
足の裏似てると親子で笑い合い
今の子はとくやとくやと子供の日
きびしさは後を継がせる子に育て
親の氣も知らず跳ねたり踊ったり

小石城虎旅風 一三夫 庸佑 聡夢 六竜子 弓彦 明朗 一三夫 東洋樹 良子 恒明 静馬 清人 庸佑 虎城 静馬 痴亭 静江 蘭幸 不也 形水 虎城 杜的 弘生 柳志 多幸

リモコンがそろそろ利かぬ十二才
大学で棒振る程の子に育ち
迷い子は顔いっぱいの口で泣き
貧乏を承知のようにまた生まれ
くじ運のいい子を連れて抽せん場
子宝と感謝したのは二人まで
不肖の子ひょつこ小使い呉そ去に
逆らうて寝た子の涙ふいてやり
子への夢子等の夢とがすれちがい
母ちゃんのない子へきれいに光る星
ほどほどに子にあしらわてうめい
兼題「机」 清水白柳選

一点子 葛城 眉水 一点子 天笑 多久志 不朽 英詩 野迷路 雀踊子 小松園 柳選 虎城 葵江 吸遊 花梢 宇宙太 阿茶 右近 天笑 正朗 静房 美竹 庄子 つき子 形水 弓彦 鬼彦 一舟 一三夫

片づけて要らん机をまた触り
机いじつてへたな子が立たされた
思わくがはずれ机へ向きなおり
欠席の机がさみし風邪はやる
鋼鉄の机に冷えるミニの膝
汚職して机の上の紳士録
机の前にもかく座る時間持つ
居残りの机へうどん運ばれる
机へ足のせてボナナスの話なり
ご自由にお持ち下さいとは机
退職日機の足までふいておき
引っ張りに来るまで離れない机
ミカン箱の机で経木書くバイト
書けそうで書けぬ机のハエも来ず
勉強をしてくれそうな机買う
子の机くやしきときにつけた傷
あけやすいひきだしにあった書置き
大学の机は土足に堪えており
日本にチャブ台という机あり
座ってもかけてもねむくなる机
母のぐち机はさんでかされる
末っ子の机みんながものを置く
古机またった釘をうちこまれ
机に向かつて私を絞り出す
討死のように机で子が眠り
ある時の女に楯となる机
兼題「引越し」 北川春巢選

旅風 梅子 良子 笛生 東洋樹 柳志 水客 形水 一点子 吸江 旅風 花梢 不朽 梅志 多志 孚彦 小松園 不朽 葵水 鶴声 静水 静太郎 旅風 東洋樹 入仙 日満 正朗 良子

引越しへかまひのさんもふいて出る 幸代
置土産今日引越しの投票所 東洋樹
引越しに祖母とわれもの別に着き 英詩
落ちのびるように引越し雨を行き 東洋樹
引越しを手伝い泊めて貰う酒 不二也
銀行のローンが残る家に越し 入仙
弁護士も引越し代は取れと言う 摩太郎
引越し先狭いが仏壇はとけず 失名
引越しもこれで終わりの回り椅子 葛城
引越しへ酒屋一番淋しがり 美房
引越しの荷物屑屋に見送られ 天笑
引越しの今度は自分が建てた家 阿茶
乗用車で来て引越しを手伝う気 宇宙太
引越しへ世帯やつれの荷が積まれ 鬼遊
定退の引越し誰も来てくれず 静馬
引越しに馴れて鉢植だけの趣味 英詩
引越して来るなり隣の子を泣かし 千梢
引越しへつきつきともる団地の灯 潮花
引越しの手伝いに行き三日も寝 喜風
引越しも電化がしめて派手なこと 梅志
鞍がえの荷物男と待ち合わせ 柳宏子
引越した家スビツが落付かず 柳宏子
歩行器が引越し先へもう届き 旅風
引越して今日から月賦で払う家 静水
左遷の荷手伝う人のあたたかく 一三夫
パトロン落目引越までさされ 不朽
栄転の引越し空も晴れてくれ 祥月
引越しつき我が家さき子等とモメ 静歩
引越して知る人生の七曲り 季賛
引越しの左遷と思う荷ごしらえ 一点子
栄転の度に引越し派手になり 生々庵

引越して出前へ財布見当らず 柳志
寝るだけの下宿それでも又変えず 万的
引越しにバラの蕾にある未練 花梢
引越しへ貧乏神を連れて来る 静歩
引越しの当座は山の見た窓 古方
引越して空気をほめりや蚊と蠅 水客
引越して雨をかわつたものに聞く 蘭幸
引越しをして下さいと子が生まれ 千梢
コンテナは女のエゴも共に積み 虎城
監視するよに引越しを手伝われ 虎城
パトロンが出来た引越しカバンだけ 小松園
引越しの荷物天皇様も揺れ 小松園
郊外へ引越し広い庭と書き 春果
兼題「人生」 中島生々庵選
人生の哀れ教えた交差点 竹太郎
女房よすまん巻添えにした人生 百水
人生を変える魔力を女持ち 芳子
おでん屋で人生論を聞かされる 吸江
鬼になり切れぬ人生秘めて生きる 菜
ふしくれた指に人生秘めて生き 多志
人生をピエロの如く生きた喜び 与志
克明な老の日記は人生譜 痴亭
つまづいてからが人生らしいなり 天笑
人生街道ばつばつ歩くことにする 蘭幸
金だけを信じ人生あまく見る 潮花
振り出しへ戻るに人生金が入り 小松園
ひとすじに來た人生にむくわれず 虎城
喜寿米寿猶人生にあきたらず 柳宏子
人生を語るピエロのアイシャドー 静歩
コンピュータでき人生観がかわり 梅志
つまづいたまま人生をはすに生き 潮花

あの人に人生預けついて行き つき子
踏みしめてきた人生にけつまずき 花梢
蝶よ花よと人生の幕があき 小石
或る人生ヨタヨタ停年までつとめ 万的
人生を判こ一つでけつまずき 雀踊子
ドヤ街に住んで人生かえりみず 蘭幸
凡人で人生つつがなく暮し さいむ
明暗の交錯人生のシンホニー 阿茶
まっすぐに人生歩けば煙がられ 静馬
人生の裏を泳いできた情 潮花
遣影咲々と人生を話かけ 潮花
人生に悔いなき日々よ芸の虫 聡夢
志あり人生を軽んぜず 白柳
それは父ちゃんの人生と子息の意見 凡九郎
その日まで飲んで人生全うし 静馬
人生ですよと他人はそっけなし 静水
子にバトン渡して人生まだ迷い 静馬
ああ遂にわが人生も釜ヶ崎 静水
人生へ女の嘘はたかが知れ 静馬
八十五点という人生でありし 静水
しぶちんに徹し人生おもしろし 静水
人生を問えば山僧茶をすすめ 静水
人生を拝む心で埋め合わせ 静水
★七月号本社句会の入選句に喜酔とあるのを 静水
葵水と訂正。



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

玉造川柳会

(大阪市) 西出一栄報

演壇のざわめき何かあったらし
ざわめきへ独り思案がまともらず
ざわめきに子の泣く声を聞きわける
ざわめきを逃れ小鳥に耳をかし
ざわめきへ手応えありと見る弁士
ざわめきを尻目にスターの楽屋入り
ざわめきを頭に旅の湯につかり
ざわめきを社長留守やとすぐ判り
珍客へカメラカメラの列並ぶ
珍客へ夫も知らぬ料理が出
珍客が泊ると云うてあわて出し
珍客へ土地の土産は重いもの
珍客の子には通じぬ国なまり
珍客のメッキ薄くなった髪
珍客が来た日鶏最後の日
珍客へ静かに起きた台所
珍客へ少しあわてた台所
ひよっこりと噂の主が顔を出し
レンゲつむ指先ひよっこり蛙の子
ひよっこりと一人で来たを淋しがり
ひよっこりにしては疑うタイミング

綾子 金子 貞智 茂山 誓二 静馬 柳宏 吸江 白柳 肖二 眉水 雀明 雀踊 翠光 鬼遊 竹馬 弓彦

南大阪川柳会

金井文秋報

とことんてから相談もちこまれ
ヘルメット脱げば仕事の輪が残り
家内中国児の早出がかき廻し
厄介な話一からきかき廻し
人材はうまれ要領巾きかき
人材を願ひに変えた掌を合せ
定年を惜しまれて脱ぐヘルメット
厄介な犬が掘り出す不発弾
厄介はかけぬと云うた判に泣き
信心は恐ろしい願ひごと利きしあい
老夫婦息の早さも気にしあい
早出よりもっと早出のおつた駅
今日も無事感謝でぬいだヘルメット
今すり合お茶に夫婦の味を知り
厄介なことには下駄を預けられ
寺の離れで厄介の世帯する
人材の社長がすわり期待され
続くピケへヘルメット疲れが来
願かけていこう努力してはら

清子 小松 文松 凡九郎 宇宙太 野明 六龍 章雅 一栄 義千 滋雀 形水 柳宏 滋雀 弓彦 形水 好郎 誓二 吸江 金三 古舟 喜風 生方 白柳 双楽 千九郎 凡九郎

富柳会

(富田林市) 阿部柳太報

山里をロープでつなぐ炭の俵
山里にまだふんぎれぬガシタレ
根負けをさせぬ女房の甘え声
根負けして売った田地がまた騰り
連れ発った女性噂の程でなし
女性には弱おまんねんとまけてくれ
鍵かける音に女を意識する
受付は余る弁当数を読み
親友の地位受付で察しられ
すがりつく思を受付で察しなし
時ならぬ香付受付素通りし
受付に仁王のようなガードマン
ぼろくそに出来た答案名をわすれ
ぼろくそに毎度の事で苦笑い
ぼろくそに初めと終いぐいながい
始末書ですむぼろくそにさからわず
上役をぼろくそに首が近いのか

吸江 東雲 風吉 摩天 百水 笑太 遊仙 静馬 紅馬 千重子 好郎 白柳 柳郎

同じこと云うては楽しむ老夫婦
人材が宮仕えでは見えぬ老夫婦
離婚さわきえとは見えぬ老夫婦
顔継ぎがお願いしますと頭下げ
長生きをしましうなあと老夫婦
落ちて来た鉄ヘルメットに助けられ
まだ親を目覚し変りにする早出
人材はとつと会社やめていき
ヘルメットスピード出すぞと云う構
人材といわれるだけの腹を見せ
早出して勝手のちがう交差点
ヘルメット角材持つて勝つ算り
厄介をかけた昔は記憶なく
厄介に思った此の子の世話になり

敬野 喜早 庸若 静章 綾女 肖二 喜留子 智留子 君子

あすなる川柳会

(大阪市) 川村好郎報

借り傘が高うつくので濡れてゆき
値上げしたかまほ板だけ厚くなり
黙ってりや光る値打ちを口に出し
指先へ保険をかけている値打ち
どん底でふつと真正面を見る
はれものにされる短気をうらやまれ
ミニがまた短こうみえてくるも春
銀行のほかは社長短気なり
好素青慶弓彦
郎郎郎郎彦

るべに川柳会 (大阪市) 川村好郎報

高い指輪はめてもハイミス尚孤独
倒産へ新緑もない汗を拭き
若葉見れば草でも抜いて下さしな
指輪ピカピカ嫁ぐ日へ誇らしく
人にやる指輪はめて帰国する
はめてる方のお手もわざと置き
三〇〇万のダイヤの指輪売れている
初めての指輪右手でも気がひける
気取る金の指輪がやぐざめき
好幸扁瓢茂清兄睦世
郎子里太児兄睦世

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

資本家も同じあくびで夜が明ける
子の眼に気付くあくびが殺し
聞いているのかあくびとがめられ
家族連れパパのふところみな知らず
家族連れ娘は嫌う齡になり
くらえてあくびハンカチ間に合わず
あくびして水鼻する夜泣きそば
朝刊を欠伸と共に読む初発
裏話あくび混りで聞き流し
あくびして聞いているらしい電話口
家族連れ一人はたしかな居候
一台のバスは見送る家族連れ
花散った駅へ左遷の家族連れ
あくびかみ殺す女の手の色気
史静吸茂草弥悦景良秋良誠生白鬼
好波江男春生治吉水章二長扇遊

ヒステリー猫のあくびも腹が立ち
隅っこであくびしながらう立たず
あくびばかり出て寝つかれぬも旅
聴衆のあくびが見えた声になり
借金断るつもりなまあくび
つねつねとくぐり欠伸出て困り
寝不足のあくび職場でひやかされ
あちこちへあくびうつして終電車
あくびかみしめ涙指で拭き
腹の子がよく動きますとあくびする
三部経仏にすまぬが出るあくび
辞書もノートもかすんで来たあくび
家族連れ食って荒して又来ます
親馬鹿をさらけ出して又来ます
家族連れいつもブランドはママがたて
ライバルの指輪くやしけどきさい
家族連れ大食堂で又会うて
ハツぎきにされた車券が散る日暮れ
好薫重輝敏吐雄真孝幽奈奈喜太呂
郎風夫成夫来峯砂庸子玄風々々

どんぐり川柳会 (羽曳野市) 川村好郎報

サービスの限界知らせる眉のしわ
サービスがそろばんの上に乗って
サービス品買って女房に叱られる
自慢するたびに月賦がふえてゆき
一寸が一尺になる釣自慢
病人が自慢話に起きあがり
嘆息するなどは云われ桜花
ど自慢が銀座まします床柱
自慢過ぎて急にだまり込み猫
サービスに坐って居れないまねき
サービスの過剰贈賄の隣まで
値切るとき靴墨サービスしといてや
サービス品もうわしたはだまされん
女子病棟ここでは肥えても自慢出来
どさくさの時も女は台所
桂馬吐来馬
一吐来馬
良章峰々
正弘
風太
浅野
一治郎
輝郎
良行
女子病棟
どさくさの時も女は台所

ひとりもてサービス料も頭割り
好郎

若芽川柳会 (堺市) 吉岡青香報

男一匹抹茶の泡に狼狽える
怒っても機嫌よくてもカニの泡
お見合へ母も楽しめアドバイス
落ちぶれる立場にある娘にさとし
選ばれる方が選んで居る企業
妥協したところ汚職を捉みだし
妥協しだともみ手の主要協せず
捨値だともみ手の主要協せず
妥協するのと云って条件一つ出し
妥協するの腹を見られて煮焼のみ
妥協せず姉は離座敷で見るテレビ
もうキッスぐらいで妻は折れ合わず
妥協する気持笑顔にちらつかせ
建増しをするのにして子と妥協
失恋の男まさりには雨を聞き
男まさり町会までも首を出し
女子寮に男まさりがまだ残り
距離おけば男まさりのいいところ
今日だけは男まさりでない見合い
容姿かた男まさりほうかがえす
男まさりの母で支えた混乱期
男まさりに掃除は逃げて任せきり
目賀芳月報
倒産の窓へきれいな五月晴れ
四月馬鹿だますつもりでつい忘れ
億のつく汚職に五人辞めただけ
ハイテンでガムをかみおみ道を行
血は争えず長男次男かみ人好し
血色が良ければよくてまたやなみ
出血のサービスなどと薬いどり
柳五郎

親の血が氣長な俺にしておかず
血統書汚して野犬の子をはらみ
血のめぐり悪いのが居てもあまし
名女の恋に難種の血がまじり
処女の血も今宵限りのつかくし
血のめぐり悪い奴だとおちよくられ
月々に見る血へ不安の初診料
欠点があるから利点がよくわかり
楽幸博伊一水胡浄
天仙友久声仙風美

ウイロー社 (ハワイ) 若本多久志遠

短気者役目の手前胸をなで
短気な男自分の墓も建て
短気者なだめる内助の妻があり
お隣りは似合い夫婦派手に荒れ
ニックネーム電気で父は世を終り
通り雨待てぬ短気の濡れねずみ
好きな娘に逢えは短気もどこえやら
堪忍袋に短気入れて締め
親父から受継いだもの短気だけ
空腹になつて短気も落ちつきぬ
短気者過ぎて幸運又逃がしめ
メンデルの法則通り子も短気
短気だけは似るなと父遺言し
生来の短気が祟りまだ独り
釣れるまでジリジリしている短気者
松の廊下で五万石を棒にふり
まっ直な釘を短気が無理にまげ
万里歩

南海電鉄川柳会 (大阪市) 辻圭水報

A・T・S それでも運転士の目があう
A・T・S 知らずローカル線の春
A・T・S と聞いて夜汽車も眠れ
A・T・S ついで株価がまた騰り
老楽の A・T・S がチト狂い
痴天郎

大鉄川柳会

松川杜的報

雑草の抵抗ブルドーザの下で萌え
草萌ゆるしかと地につく松葉杖
心しずかに喜劇の顔つくる
一幕の喜劇となつたストの余波
女ひとり今日を生き抜く鍵であり
合鍵の曲り工合に見る個性
ランブ透かしてやき鳥の串を選り
明治百年古いランブに灯をともし
美杜初水耕宗実永
穂的甫客三悟男断

川柳たましま

水粉千翁報

あきらめることも十代桜散る
まだ話ありますよここまで歩きましよ
道連れのよくも歩いて来た笑顔
この花に想い出のあり遠い雲
大鯉の心で乗った手術台
花の下一人歩く道がない
待つ人をここに信じて花時計
リーダーが歩くエリートについて行く
床の間の鯉は家運と別にはね
花に問う鏡の中のたくらみを
畳の目数えて小言聞き流し
負けた子がじつと見上げる鯉職
愛の翳沈めて春の花を活性
成算のメドへ畳を蹴って立つ
貪欲へけんらん死す錦鯉
冬を咲く花に貧しき励まされ
花の下半叱られるだけ歩き
亡き妻のここまで読んだ花菜
いがみ合う境界線のバラが咲き
花の山酔うた女が突き当たり
扇里豊林旭八秀柳柳克三三
水風作鶴峯三笑子鶴枝坊

高知川柳社 (高知市) 川竹松風報

この川で父祖代々がやしなわれ
影二つうつしたままで川流れ
明治百年流れをうつす鏡川
伸雪美
枝知

この川が上佐と伊予との国境い
川上で何かがあった流れ物
どぶ川へ市長気長な返事する
びわ湖から市を知らない鮎がくる
一、二本柳が残る里の道
猫柳切つてアネモネ添えに挿し
社会科の担任バーで社会学
年頃の社会を甘くみた家出
失恋のあとはニヒルな社会観
耐句うことは社会の裏通り
社会福祉受ける方が薬に食い
社会見学として見るストリップ
新緑へ思いなおして髪をとき
別れさす話へ親類集められ
良心の苛責グラスの酒が濃し
これが俺の生きる顔かと鏡見る
寛一竹紅松窓桂たかし江
人莊雨風花緑

川柳あしなみ日岡山吟行保西岳詩報

産声が迎えるさんばの靴の位置
初孫と云うよろこび倍にして安産
伝説に残る悲運の御陵跡
めで行く花も仲間ローカル線
ローカル線ミニスカートが一人乗り
旅を来て土地のなまりの温かさ
団地ビナこじんまりと春迎う
貫録も見せず団地に移り住み
団地駅前のラッシュを運び出し
のぞき窓笑みと一緒に錠開ける
団地から里へ帰って宮詣で
播州平野山つながりに月走る
新緑が目ゴンドラの昇り行く
加古川の川面にあさく春光る
播州平野ふところに入る風の色
煙突が播州平野をせまくする
岳水克実初青白好尚光洋一但河成秋
詩客利男浦池李子雨鋒平軒洲童行室

川柳塔社八月句会

日時 8月3日(土) 午後六時
会場 天性寺(てんしやうじ)
市電・市バス停前・上本町四丁目
(両側がガソリンスタンド)
(電話761・4868番)

兼題 柳話

「友情」
「人氣」
「コケシ」
「窓」

席題 三題 当日発表
会費 二百円

★ 投句だけの方は切手五十円封入

川阿西児若
村田万島本
好万柳与多
郎的宏志久
選選選選志
各題三句

大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話大阪03985番

9月の兼題

「気まぐれ」
「走る」

「ゲーム」
「夕暮れ」

十月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
近作柳樽 (10句) 西尾 栗 選
課題吟 (各題5句以内)

「プラン」 舟木与根一 選
「子連れ」 中川 晃 男 選
「役付き」 小畑自有 浪 選
★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選
近作柳樽 (10句) 西尾 栗 選
課題吟 (各題5句以内)

「本番」 平田 実 男 選
「スカート」 米虫 一乃字 選
「消える」 馬場 魚山 選

★川柳塔の投句は本社同人に限りません。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 百四十円 (送料六円)

半年分 八百七十円 (送料共)
一年分 千六百八十円 (送料負担)

昭和四十三年七月二十五日印刷
昭和四十三年八月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集 中島蓬太郎
印刷所 大陽印刷株式会社
郵便番号 五四二
発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三六八番



たのしさ ひろがる お買物

阪急

大阪梅田本店・神戸支店
東京大井店・数寄屋橋店

チオクタンS

〈肝臓を守る〉 肝臓薬・ビタミンなど14種成分配合

●肌あれ ●二日酔いにも

連日のお仕事、お酒やタバコのみすぎなどで、肝臓が弱っていませんか。疲れをとり健康を保つには、日頃から肝臓の働きを活発にするよう心がけてください。チオクタンSは、肝臓の働きを高め、疲労をすみやかに回復します。

疲れたら さあのもう



フジサワ会の店で
おもてくださいます



フジサワ薬品

全店中元大売出し

お中元に
松坂屋の
食料品!



大阪天満橋
松坂屋
電話942-2201

・2 D K・

★八月号が出るのでスグ二賞発表の十月号。そしてイキ抜くまもなく新年号と、タテつづけに編集室がアラシに見舞われる。★改題三年目が近くやってくる。予定どおりの伸びかたである。主幹以下の努力は、もう一息で増ページ体制にはいれるところまできた。ここへくるまでには、表面へすこしも名前を出さずにご協力をねがってきた多くの方々のおもむきをお忘れはいけません。★暑中広告のご協力、いつもありがとうございます。★白柳氏の「路郎先生の初心時代」をはじめ、多くの原稿が次号以後になった。各地の柳壇がたまる一方なので心が重い。

★「百句シリーズ」は好評裡におわった。七月号も現在は一歩もなく、書店からの返品待ちというカタチである。★八月からの句会場は上本町六丁目から徒歩で五分間ほどの天性寺というお寺だ、最高に良い会場である。ここ一年もすれし足場も満点だ。ぜひ一度、会場だけでも見に来てください。★はくもふくめてだが、川柳家はもともとと勉強しないダメだ。ウンと読むことである。(不二田一三夫)

暑中お見舞い

東野 大八

505 美濃加茂市太田町
深田 四六七

3,000円以下で買えます—充電式!

CADNICA®



SANYO
三洋電機株式会社

●SV-1000 ¥2,980

サンヨーカドニカカミソリ

エック



気品あふれる
シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。

その秘密は、東レテロンR—激しい動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。



東レ **テロン** (ポリエステル 100%)

オルデロン

スーツ・スラックス

TORAY 東洋レーヨン株式会社

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年七月二十五日 印刷
昭和四十三年八月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔 八月号

定価 百四十円

(送料 六円)